

ピストルの使い方

——（前題——楊弓）

泉鏡花

青空文庫

はじめ、私はこの一篇を、山媛やまひめ、また山姫、いずれかにしようと思った。あえて奇を好む次第ではない。また強いて怪談がるつもりでもない。

けれども、現代——たとい地方とはいっても立派な町から、大川を一つ隔てた、近山ながら——時は晩秋、いやもう冬である。薄いのも、半ば染めたのも散り済まして、松山の松のみ翠深く、丘は霜のように白い、尾花が銀色を輝かして、処々に朱葉もみじの紅の影を映している。高嶺たかねは遥はるかに雪を被かいで、連山の波の寂然と静まった中へ、島田鬚しまだに、薄すすきか、白菊か、ひらひらと簪かんざしをさした振袖の女が丈立ちよくすらりと頭あたまわれた、と言うと、読者は直ちに化生けしやうのものと想わるるに相違ない。

——風俗は移った。

天衣、瓔珞ようらくのおん装よそおいでなくても、かかる場面へ、だしぬけの振袖は、狐の花嫁よりも、人界に遠いもののごとく、一層人を驚かす。

従つて——郡多津吉こおりも、これに不意を打たれたのだと、さぞ一驚きつを吃したであろうと思ふ。

しかるに振袖の娘は、山姫どころか、（今は何と云うか確たしかでない）……さ、さ、法界……

…あの女である。當時いまじきは、安来節、おはら節などを唄うと聞く、流しの法界屋ねえの姉さんの仮装したのに過ぎない。——山人の研究を別として、ただ伝説と幻象による微妙なる山姫に対して、濫みだりなる題名を遠慮した所以ゆえんである。

それから——暑い時分だから、冷いことも悪くない。——南天燭なんてんの紅い実を目に入れた円い白雪は、お定りその南天燭の葉を耳に立てると、仔細しさいなく兎うさぎである。雪の日の愛々しい戯れには限らない。あまねく世に知られて、木彫ねり、練もの、おもちゃにまで出来ている。玉子形たまごがたの色の白い……このもの語がたりの土地では鶴つるの子こ鰻まんじゅう頭じゆうと云うそうである、ほつとり、くるりと、そのやや細い方を頭かしらに、緋ひのもみじを一葉挿ひとはして、それが紅い鳥冠とさかと見えるであらうか？

気の迷いにもせよ、確たしかにそう見えた、と多津吉は言うのである。

——聞きがきする私のために、偏ひとえにこれは御承認を願いたい。

山の上の墓地にして、まばらな松がおのずから、墓はかしよ所ところ々々の劃しきりになる。……一個所、小高い丘の下に、蓑みので伏せて、蓑の乱れたような、草の蓬おどろに包んだ、塚ともいおう。塔婆、石碑の影もない、墓の根に、ただ丘に添って、一樹の記念しるしの松が、霧を含んで立っている。

笠形かさなりの枝の蔭に、鳥冠が、ちらちらと草がくれに、紅い。……華奢きゃしゃな女の掌てのひらにも入りそうな鶏が二羽、……その白い饅頭ふたつが、向い合いもせず、前向に揃うともなしに、横に二個、ひつたりと翼を並べたように置いてある。水晶に紅べにをさした鴛鴦おしどりの姿にも擬なぞらえられよう。……

墓へ入口の、やや同じたけの松の根に、ちよつと蟠わだかまつて高いから——腰を掛けても足が伸びるのに、背かがみになつた膝ひざに両手を置いて、多津吉は凝じつと視みていた。

ステッキ
洋杖は根に倒れて、枝にも掛けず、黒の中折帽なかおれぼうは仰向けあおもむに転がっている。

ここからでも分るが、その白い饅頭は、草の葉にもたせて、下に、真四角な盆のように、こぼれ松葉の青々としたのが、整然として手で梳すいたように敷いてあつた。

俗よに言伝える。天狗てんぐ、狗竇くひんが棲すむ、巨樹、大木は、その幹またの枝こうせの交叉ひところの一所、
氈せんを伸べ、床を磨いたごとく、清く滑かである。——禁を犯して採伐するものの、綱を伝つて樹を上りつつ、一目見るや倒さかさまに墜落するのが約束らしい。

きれいな、敷松葉は、その塚の、五寸の魔所、七寸の鬼の領とも憚はよばからるる。

また、あまた天狗が棲すむと伝える処であつた。

緋ひの鳥冠の小さな鶏は二羽白い。

多津吉は一度、近々と視て、ここへ退いたまま、怪みながら、瞻りながら、左右なく手をつけかねているのである。

颯——と頸から、爪さきまで、膚を徹して、冷く、静に、この梢をあれへ通う、梢と梢で餌を打って、耳近に、しかも幽に松風が渡って響く、氷の糸のような調律である。

そこへ——振袖の女が、上の丘へ、帯から上、胸を半身でくつきりと美しく出た。山では、ちつとでも高い処が、遠いように見え、また思いのほか近く見える。霧も薄し、こちらからは吃驚するほど、大きく見た、が、澄切った藍色の空を遙に來たように、その胸から上半分の娘の方は、さも深そうに下の墓を覗いて、帽子を転がして、ぼんやりうつむいている多津吉を打撞ったように見ると、眉はきりりとしたが優しい目を、驚いた様に睨りながら、後退りになつて隠れたが。

しばらくすると、そつと、うしろから、わざと足数を拾って、半ば輪を描いて近いた。上からすぐ男の居る処へ道はあるが、その阪下りに來たのではない。丘の向う裏から廻つて、開いた平場を寄つたのである。

「旦那。……」

旦那と、……肩越に低く呼んだが、二声とも呼ばせず、男は直ぐに振向いた。女の近寄

るのを、まんざら知らないのではなかったらしい。

だから、女も、ものが言いよかつたろう、もう、莞爾して、

「何をしていらつしやるの。」

下品な唄を、高調子で繰返す稼ぎのせいか、またうまれつきの声調か、幅があつて、そして掠れた声^{かす}が、気さくな中に、寂しさが含まれる、あわれも、情も籠^{こも}つて聞こえた。

此方も古塚の奇異に対して、冥想^{めいそう}黙思した男には相応^{そぐ}わない。

「実は——お前さんを待つていたよ。」

成程、中折帽を転がしている人間らしい。これなら何も、霧でぼかし、丘で隔て、間に松の樹をあしらつてまで、骨を折つて二人を紹介するがものはなかった。

けれども、もう一度、繰返すが、町近くで、さまで高くないこの山、多くの天狗の集り住むと、是沙汰^{これぎた}する場所である。雲の形、日の隈^{くま}など、よりよりに、寂しい影^{かげ}が颯^{さつ}とさすと、山遊びの人々も、川だちの危い淵^{あぶな}を避けるようにして場所をかえるので……ちようどこの辺がいまその深い淵であつた。

赤土の広場の松の、あちこちには、人のぶらつくのも見え、谷に臨んで、莫塵毛^{もぢん}氈^{せん}を敷いた一組、二組も、色紙形に遠く視^{なが}められる。一葉^{ひとは}、二葉^{ふたは}、紅の葉も散るが、それに乗

つたのは鶏ではない。

それに、真上にもあるような、やや、大小を交えて、たとえば、古塁こるいの砲台のあととも思われる、峰を切崩して、四角に台を残した、おなじ丘が幾つもある。上が兀はげで、土がきれいで、よく見ると、詭あつらえた祭壇の……そこへ天狗が集りそうで、うそ寂しい。——実はその幾つかを、あるいは縫い、あるいは繞めぐつて、山道を来る途中で、もうちつと前に、多津吉は、この振袖に逢あつたのである。

町から上るには、大手擲からめて手といったように、山の両方から二口ある。——もつともこうした山だから、草を分け、茨いばらを払えば、大抵やとどの谷戸からも攀よじることが出来る……その山やまふところ、懐かさわを搔かきわけて、茸きのこがり狩をして遊ぶ。但しそれには時節がやや遅い。従つて、人もさまざまにはなかつた。

多津吉は、町の場末——件くだんの擲りんどう手の方から、前刻尾づたいに上つて来た。
竜胆りんとうが一二輪。

小笹の葉がぐれに、茨の実の、紅玉を拾わんとして、瑠璃るりに装よそおいを凝こらした星の貴女が、日中あまくだを天降あまくだつたように。——

「ああ、竜胆が咲いている。」

「まあ、ここにも。」

——更あらためて言うが、その時は女まじりに、三人ばかり土地の知己ちかづきで、多津吉に連つれが
つた。

その女のつれが、摘んで、渡すのを、自分の見つけたのと二一本三本、嬉しそうに手に
した時……いや、まだ、その、一本、二本、三本を算かぞえない時であつた。

丘の周囲まわりを、振袖の一行——稚児ちご鬻まげに、友染ゆうぜんの袖、緋ひの襷たすきして、鉄扇まが擬いの塗骨おの扇子う
を提よげて、義経袴よしつねばかまを穿はいた十四五の娘と、またおなじ年紀としごろ……一つ二つは下か、若
衆かしゆまげ鬻まげに、笹色の口紅つけて、萌黄もえぎの紋つきに、紅あかい股ももひき引ひで尻端折しりはしよりをしたのと、もう
一人、……肥ふとつた大柄な色白の年増で、茶と白の大市松かいまきの搔か卷まきのごとき衣装で、青い蹴け
出しだを前はだけに、帯を細く貝の口に結んだのが居た。日中ひなかといえども、不意に山道で出
会あつたら、これにこそは驚おどこう。

かかる異様なのが、一個々々、多津吉等の一行と同じ影を這はわせて歩ある行るいた。

彼か処しこに、尾花おしなが十穂とほばかり、例のおなじような元はげた丘の腹に、小草おぐさもないのに、すつ
きりと一輪咲いて、丈も高く蒼つぼみさえある……その竜胆りゅうたんを、島田鬻しまたのその振袖、繻しゅ珍ちんの帯
を矢の字にしたのが、弱腰じやくこを嫺しなやかに、白い指をそらして折ひつて取とつた。

……狩を先んじられた気がちよつとした。

その多津吉の傍へ、何の介意もなく、するすると、褌をちらりと捌いて寄ると、手を触れるばかりにして、竜胆の紫を黙つてよこした。流れた瞳の清しき。

「ありがとう。これはどうも。」

とばかり多津吉は、そのまま連に連れられようとして、ふと見ると、一方は丘を、一方は谷の、がけ際の山笹を、ひしやげた茶の釜底帽子が、がさがさと、乾びた音を立てて揺つて、見上皺を額に刻んで、もじやもじや眉に、きよろりと目を光らした年配の漢が見えた。異様な一行の連らしい。

娘と手を合わせたのに、何となく気がさして、多津吉はその漢に声を掛けた。

「茸はありますか。」

「はあ、いや松露でな。」

もつてのほか、穏和な声した親仁は、笹葉にかくれて、崖へ半ば踞んだが、黒の石持の羽織に、びらしやら袴で、つり革の頑丈に太い、提革鞆を斜にかけて、柄のない鑄小刀で、松の根を搔廻わしていた。

「……松露がありますか、こんな処に。……」

「ありますかつて、貴方あなた、ほれ、これですが。」
ころ、ころ。

「ほれ、——諸国、旅をして存じております。砂浜から、ひよっこりひよっこりと出る芋づるの奴より、この……山の松露が、それこそ真まことに香かうしい露この凝こったので、いわば松の樹しょうこんの精しょうこん根こんでがしてな。」

「松露を掘つてるようじゃ、法界屋、景気が悪うございますね。」

男のつれは笑つたが、

「あなた幾いく干金くらかお遣いんなすつたの、御祝儀を。」

と女のつれが云つたのに、多津吉はついうっかりでいたのを心着いた。——竜胆を手折つてくれたその振袖は、すらすらと裳もすそに薄すすきを掛けた後姿が見えて、市松大柄な年増は、半身を根笹に、崖へ下りかかる……見附かつた山の幸に興じたものであろう。秋の山は静しずかに、その人たちの袖摺そでずれに、草のさらさらと鳴るのが聞こえて、釜底帽子の親仁も、若い娘たちも、もう山懐に深かつた。

「そこらをぶらつくうちにはまた出会いますよ。あの扮装なりです……見違えはしませんか

ら、わざわざ引返すのも変ですから。……」

だのに、それから、十歩、二十歩とはまだ隔らないうちに、目の下の城下に火が起つた——こういうと記録じみる——一瞬の下に瞰下ろさるる、縦横に樹林で劃られた市街の一箇処が、あたかも魔の手のあつて、森の一束を蒼空へ引上げたような煙が濛々と揚つて、流るる藍色の川を切つて暗くした。

——町の東と西とに分れて、城の櫓と、巨剎の棟が見える。俗に魔の火と称えて、この山に棲む天狗が、遊山を驚かすために、ともすると影のない炎を揚げて、渠等の慌て騒ぐのを可笑がる……その寺の棟に寄つた時は真の火である。城に近いのは空き煙だ、と言伝える。

ちようど真中であつた。森の碎けて、根の土を振うがごとく乱るる煙は。——
見当が、我が住む町内に外れても、土地の人には随所に親類も知己も多い。多津吉の同伴はこの岨路を、みはらしの広場下りに駆出した。

口早に、あらかじめ契つた晩飯の場所と、火事は我が家、我が家には直面しない事と、久しぶりなる故郷の山に、心静に一人親むことを言置いたのは言うまでもない。

駆出した中の婦が、広場の松を低く、ハタと留まつて、前後左右を、男女のばらばらと

散る間に、この峰かたの方を振返つた。肩を絞つて、胸を外そらすと、遙はるかに打仰いだ顔はやや蒼あおく、銀杏返いちようがえしの鬢びんが引戦ひっそよいで見える。左の腕に多津吉の外套がいとうを掛けていた。

意味こころは知れよう。

「構わない、構わない、打棄うつちやつて——そこへ打棄つて——」

多津吉は上から手を振つた。自おのずから竜胆りんとうの花は高く揺れた。

声は届かない。念は通じた。が、言ことばは伝つたわらないから、婦おんなは外套あづかを預つたまま、向直つて衝つと去つた。

多津吉は一人、塚を前にして、松蔭に居たのである。

「私も貴方に逢いに來たの。」

「嘘を吐つけ。」

「あら、ほんとだわ。」

帽子をよけて、幹に立つた、振袖は肩ずれに、島田鬢しまだは男よりやや高い。

「連つれの人は？」

「松露を捜して、谷の中へ分れて下りたの。……私はお精進の女で、殺生には向かないん

ですつて。……魚でも、茸きのこでも、いきもの……」

と言いかけて、ちよつと背きながら、お転婆に笑った。

「あら、可いや厭だ。——知らないわ。」

「何をさ。」

「いいえ、いきものをね、分つて?……取るのは、うまれつき拙へたなんですつて。ですから松露を捜す気もなかつた処へ、火事だつて騒ぎでしょう。煙が見えたわ。あの丘へ駆上ると、もう、その煙は私の立つた背より低くなつて、火も見えないで消えたんですもの。小ほ火なんですな。」

「いや、悪いたずら戯だよ。」

「まあ、放火つけび。」

「違うよ。……魔の火と云つてね、この山の天狗が、人を驚かす悪戯だそうさ。」

「そう、面白いわね。」

諸国を渡る門かどつけの振袖は、あえて天狗に怯おびえない。

「じゃあ、今しがた、ここに居た、あの、天狗様の悪戯かも知れないわね。」

「ここに居た、天狗、どこに、いつ。」

かえつて多津吉が驚いた。

「そこにさ。貴方の。」

「ええ。」

「腰を掛けていらつしやる、松の根を枕にして。」

多津吉は思わず居退いた。うっかりそこへ触った手を、膝へ正したほどである。

「仰向けに寝転んで、蒼空を見ていたんですよ。」

言うまもなしに、

「御覧なさい。」

背後から、塚へするすると、乱菊の裾を、撓わに、紫の色に出て、

「まだ、整としていますのね。この白い鶏も、その天狗様の悪戯じゃありませんか。――

ああ、竜胆を。」

と、ながしめ清しく、

「まあ、嬉しい。あなたもお手向けなすつたのね。あの、そしてこの塚のいわれを御存じ

なんですか。」

翳せる袖と竜胆の紫の影は添いながら、鳥冠は冴えて紅である。

「いわれも聞きたし、更めて花の札も言いたいが、——何だか、お前さんは、魔神の眷属……と言つて悪ければ、娘か、腰元、でもあるような気がする。」

多津吉は軽く会釈して、

「その鶏は？」

「ええ、まったくよ。」

とまた莞爾しながら、翳した袖を胸に返して、袂の先を軽くなぶつた。

「天狗様が拵えて、供えたんですがね。よく、鳥が啣えて行かなかつたこと。——そこいらの墓では、まだ火の点れた、蠟燭を、真黒な嘴で啣えて風のように飛ぶと、途中で、青い煙になつて消えたんですのに。」

「鳥にしてみれば——鳥にしてみれば、は可訝いけれども。」

身を起して、寄ると、塚を前にほとんど肩の並んだ振袖は、横へ胸を開いて、隣地との土の低い劃へ、無雑作に腰を掛けた。こぼれ松葉は苦のように積つて、同じ松蔭に風の瀬が通つた。

「燃えさしの蠟燭より、緋の鳥冠の鶏は、ちよつと扱いにくいかも知れない。——嘘のようだけれど、まったく真に迫っている。姉さん、ほんとうの事を聞かしてくれないかね。」

この鶴の子饅頭は。」

「あら、ほんとうですつてば。」

片手を松葉に、

「だって、自分でそう云ったんですもの。……（俺は天狗だぞ。）ツて。……先刻、落こちてるお客をひろいに——御免なさい、貴方もお客様ですわね——私たち、離れ離れに、あつちこつち、ぶらつきますうちに、のん気らしく、ここに寝転んでる人がありますから、こつちから……脚の方から入りましてね、いま、貴方が掛けておいでなすつたその松の坊主頭——坊主じゃないんですけれど、薄毛がもやもやとして、べろ兀の大きい円の……挫げたつて惜くはないわ、薄黒くなつた麦稈帽子を枕にして、黒い洋服でさ。」

「妙な天狗だね。」

「お聞きなさいよ。何とかウイスキーでんでしよう。壘をさ、——余り清潔じゃあない手巾に載せたまんまで、……仰向いてその鼻が、鼻が、ほほほ。」

「鼻が。」

多津吉は真面目で聞く。

「隆くない、ほほほ、ちよつと撮んでやろうかしら、なんと思つて上から顔を視ると、睡

つていたんじゃないんです。円くて渋面の親仁様が、団栗目をぎろぎろと遣つて、（狐か——俺は天狗だぞ、可恐いぞ。）と云うから、（可恐いもんですか。）つてそう云うと、（成程、化もの夥間だ、わはは。）大な声なの。老人の癖に、カラカラしたものよ。どつこいしよなら親仁相応なのに、（やあ、）と学生さんのような若い掛声で、むくりと起きた処が、脊の低い、はち切れそうな緊つた身体さ。

あなた——どうでしょう、天狗様の方が股が裂けそうな大胡坐で、ずしんと、その松の幹へよりかかると、大袈裟な胡坐ツたら。あれなんですよ。むこうの、あの四角いような白い丘が、お尻の響でぶるぶると揺れるようなの。」

城下の果に霧を展いて、銀線の揺れつつ光る海の上に、紅日、山の端の松を沈むこと二三寸。煙のあとの森も屋根も、市街はしつとりと露を打って、みはらしの樹の間の人影は、毛氈とともに仄暗い。

いま振袖の指した、丘の一つが白かった。

「図々しいじゃあないの、（狐、さあ、夥間つきあい一つ酌をしてくれ。本来は、このこの塚は、白い幽霊の出る処だ。）親仁様、まだ驚かすつもりでいるのかしら。」

「何、白い幽霊？」

と、聞き返すがごとくにして、衝と膝を折って屈めた。

「紅い鳥冠の鶏の——と云うのかね。」

「いいえ、それはそれは美しい婦の方の。」

「……………」

「そして、白いのはお衣ものも、ですけど、降り積る雪なんですって。」

「その天狗が話したのかね。」

「ちびりちびりとウイスをのみながらだから。……いい加減お察しなさいよ。……こつちの木ノ葉より、羽団扇の毛でもちつとは増たろうと思うから、お酌をしますとね、（聞け

——娘。）と今度はお酌のお庇で、狐が娘になつたんですがね。……そのかわり、羽団扇の方も怪しくなつたの。でも、お話がお話だから、つい聞いたんですわ。

九州の河童の九千坊とかではありませんけれど、この土地には、——御覧なさい、お城の奥の野の果の黒い山に、八千坊といつて、むかし、数知れず、国一杯に荒廻つた天狗様を祀り籠めた処があるんですって。——（これ古服は黒し、俺は旅まわりの鳥天狗で、まだいずれへも知己にはならないけれど、いや、何国の果にも、魔の悪戯はあると見える。わずかにこの十年ばかり前までは、うら枯の秋から、冬の時雨の夜へかけて、——

迷児まいごの迷児の何とかやーい——と鐘をたたいて、魔まに捉とられたものを探す声を、毎晩のよう
うに聞いて、何とも早や首を縮めたものでござります、……と昨夜ゆうべの宿で按摩あんまが饒舌しゃべった。
……俺の友だちで、十四五年以前に、この土地へ旅をしたものが。——ッて、元はげの親仁様おとっさん
が言つたんですけど、——あなた、天狗にお友だちッてあるんでしうか。」

「八千坊というくらいだから、皆それは友だちだらうね。」

つい聞入つて真顔で答えた。振袖は、島田の鬢びんをゆらゆらと、白歯で片頬かたほえみ笑をしてい
るのに。——

鬢えもんのほつれに顔はなお白い。火沙汰に丘を駆けたというにも、襟裏くれないの紅くれないのちらめくまで、
衣紋えもんは着くずれたが、合わせた褌つまと爪つまさき尖あは、松葉の二針相合あいがつしたようにきりりとして
いる。

「その貴方、天狗様の友だち……友だちの天狗様……あら、何だかこんがかりました。
いえね、その自分で天狗だ、と云つた親仁様おとっさんの友だちが、やがて十年ほど前に、この土
地へ来なすつた時も、旅籠はたごでとつた按摩あんまが、やっぱりさ、ここ十年前までは、うら枯の秋
の末から、冬の時雨の夜へかけて——迷児の迷児の何とかやーい……で、何とも早や首を

縮めたものでござります、と話したと云うのを聞いた事があるから、ここの城下の按摩は、お景物話に、十年前の神隠しを話すのが習慣しきたりと見える。……

——親仁様がそう云いましたね。おなじ杉山流だかどうか知らないが、昨夜ゆうべの旅籠で夜が更ふけて、とにかく、そんな按摩の話した事だから、ほんとうかどうかは分らないけれど、——山の、ここの、この塚は——

親仁様が、貴方のおいでなさいました、その松に居直つて、片膝立てて、手首の長く出た流行はやらない洋服の腕で指さしを。」

おなじ状さまに、振袖をさしのべたが、すらりと控えた。

「いやだ、……鶴子饅頭が食べたそうだ、ほほほ。」

「むむ。」

多津吉は頬張るごとく頷うなずいた。

「やりたまえ。……第一形もよし、きれいだよ。敷いてある松葉は毒にはならない。」

「ええ、私なんか、お腹なかがすけば、他国の茸きのこだって生で食べます。人間は下つてますけれど、そんな事に掛けては仙人ですから、食ものに毒も薬もないんですが、実みを入れて、……何ですか、お聞き下さるようですから、一段語りましてから御祝儀を頂きますわ。」

ね、洋服で片膝立てたのは変なものね、親仁様、自分で名告つた天狗より、桃を持たしたい、おおきな猿なかに見えた事。

貴方、ここには、——この城下で、上手名人と言われた近ちかつ常ねさんという……：評判の、いずれ、そんな人だから貧乏も評判の、何ですかね、何とか家かとか云つたけれど私にはよく分らない。(指環も簪も拵も揃えるのじや。)と親仁様が言つたから銚かざり職やさんですわね。その方のお骨が納おさまっているんですつてね。」

「ああ、銚職——じやあ男だね。」

「そうよ、ええ、もう随分のお年でしたつて。」

「待ちたまえ。……骨の入っているのが、いい年の銚職さん、近常か——それにしては、雪の中の美しい、……何だっけね、婦人おんなの白い幽霊と云つたのはおかしいね。」

「まあ、お聞きなさいよ。——貴方は、妙に、沈んで落着いて、考え事をしているように見える癖に、性せつ急かちだね、——ちよつと年をお言いなさい、星を占みてあげますから。」

と熟じつと瞳を寄せつつ、

「星しやうの性しやうなら構わなけれど、そうでなくつて、そんな様子だと怪我けがをする事よ。路みちに山坂がありますから、お気をつけなさいなね。」

「怪我ぐらいはするだろうよ。……知己ちかづきでもない君のような別嬪べっぴんと、こんな処さしむで対か向かいで話をするようなまわり合せじゃあ。……」

「まあ、とんだ御迷惑ね。」

「いや覚悟をしている。……本望だよ。」

「嬉しい事、そんなにおつしやつて下さるんですもの、私かつて、……お宿までもついて送って行くわ。……途中で怪我なんかさせませんわ。生命いのちに掛けても。……」

多津吉はいささか気を打たれたように目を睜みはつた。

「同伴つれはどうなんだね、串じょうだん戯たんぼにも、そんな事を云つて、お前さん。」

「谷へ下りたから、あのまんま田畝たんぼへ出て、木賃へ引取りましようよ。もう晩方で、山に稼かせぎはなし、方角がそうなんですもの。」

「だって、一座の花形を、一人置いて行きつこはなからうではないか。」

「そこは放し飼がいよ。外ねぐらに罫ねぐらがないんですもの、もとの巢へ戻ると思うから平気なもの。それとも直ぐ帰れなんのつて、つれに来れば、ちよつと、隠おんぎよう形おんぎようの術うを使うわ。——一座の花形ですもの。火遁かとんだつて、土遁かとんどろどろどろ、すいとんだつて、焼鳥だつてお茶の子だわ。」

「しかし、それにしてもだね。」

「苦労性ね、そんな星かしら。」

「きみの星は！ 年は？」

「年は狐……星は狼。……」

「^{すじ}凄^すいもんだなあ。——そこで、今の話だが。」

「ええ、——白い幽霊の訳はね、天狗様が按摩に聞いた話を、私にしたんですよ。……可^よござんすか。」

明治……あれは何年とか言いました、早い頃です。——その^{かぎりや}銚^{しやべ}職^{しやべ}の近常さんの、古^{あはらや}畳^{あはらや}の茅^{あはらや}屋^{あはらや}へ、県^{あはらや}庁^{あはらや}からお使者が立ちました。……^{あご}頤^{あご}はすつぺり、^{ほおひげ}頬^{ほおひげ}髯^{ほおひげ}の房^{ほおひげ}々と右^{あはらや}左^{あはらや}へ分^{あはらや}れた、口^{あはらや}髯^{あはらや}のピンと^は刎^はねた——（按摩の癖に、よくそんな事を^{しやべ}饒^{しやべ}舌^{しやべ}つたものね）……もつとも有名な立派な方ですとき、^{めぬき}勸^{めぬき}業^{めぬき}課^{めぬき}長^{めぬき}さん、^{こづか}下^{こづか}役^{こづか}を二人、^{わか}供^{わか}に連^{わか}れて、右^{あはらや}の茅^{あはらや}屋^{あはらや}へお^い出^い向^いきになると、^{めぬき}目^{めぬき}貫^{めぬき}、^{こづか}小^{こづか}柄^{こづか}で、お侍の三千石、五千石には、^{わか}少^{わか}い^{わか}うち^{わか}馴^{わか}れていなすつても、……この頃といつては、ついぞ居^いまわりで^い見た事もない、大^いした官^い員^い様のお^い入^いですし、それに不^い意^いだし、また近^い常^いさんは目^いが近^いくつて、耳^いが遠^いくつていなすつたそうですからね、^い継^いはぎさ、——もう^い御^い新^い造^いさんはとうに亡^いくなつて、子^い一人、お老^い母^いさん一人の男^いやもめ

——そのお媼ばあさんが丹精の継はぎの膝掛はを刎なねて、お出迎え、という隙もありやしますまい。古火鉢と、大きな細工盤しきとで劃しきつて、うしろに神棚まつを祀まつった仕事場に、しかけた仕事の鉄鎚かなづちを持ったまま、鑿たがねをおさえて、平伏をなさると、——畳が汚いでしょう。けばが破れて、じとじとでしょう、弱ったわね、課長さん。……洋服のもつ立尻たてじりを浮かして、両手を細工盤について、ぬツと左右の鯨髯なますひげ。対手あいてが近眼ちかめだから似合ったわ。そこへ、いまじゃ流行はやらないけれども割安の附木ほどの名刺を出すと、銚職の御老体、恐れ入って、ぴたりとおじぎをする時分には、ついて来た、羽織なしで袴はかまだけの下役が、手拭てぬぐいを出して、ソツと課長さんのお尻の下へ当がうといった寸法ですつて。」

「光景くわ観みるがごとし……詳くわいなあ。」

多津吉は苦笑した。

振袖は案外真面目で、

「……お亡くなんなすつてから、あと、直ぐに大層な値になって、近常さんの品ものは、そうなると、お国自慢よ。煙管きせる一つも他国へ取られるな、と皆蔵しまいこ込こむから、余計値が出るでしょう。贗にせもの沢山にせになって、鑑定が大切だが、その鑑定を頼まれて確かなのが自分だつて、按摩てのひら、（掌てのひらに据たえて、貫目を計つて、釣合を取つて、撫なでてかぐ。）……とそう云う

んですって、大変だわね。毛彫浮彫の花鳥草木……まあ私のお取次ぎは粗雑ぞんざいですよ。

(匂がする、)と言うくらいだから、按摩、それから、それへ聞伝え、思い込んで、(近常の事は余程くわし詳しいようだ。)と天狗様が、私にさ、貴方、おじぎの仕方から、もつ立尻の様子まで……その昨夜宿ゆいべで聞いたつていう按摩の遣った通り——按摩は這はいましたとき、話しながら。——私は時々お酌をしながら聞いていて、その天狗様に這はわれたらどうしよう、と思つたんですよ。いかに私だつて気味が悪い。」

「まさか、昼這う奴があるものか。」

と多津吉は投げるように言つて再び苦笑した。

「だつて、そこが魔ものじゃあなくつて?……それに酔つてるんでしょう。ウイで沢山な処へ、だんだんスキツて来てるんですよ。」

「何の事だい、スキツて来るとは。」

「私にも分らない、ほほほ。」

と、片褌かたつまを少し崩すと、ちらめく裳もすそ、紫の袖は斜ななめになつた。

「承れ、いかに近常——と更あらたまる処だわね。手拭しろうぎの床几しょうぎでさ。東京に美術工業大博覧会がある。外国に対しても晴の仕事じゃから、第一は、お国のため、また県のため、続いては、

親仁おやじの名誉のため、心血こころを灌そそいだ出品をするように、——大仕事となれば、いずれ費用いりめも掛かろう。手間も要いらう。官より直接とは参らぬが、そこは有志の資本家と内約おつかが結んである。どうじゃ、親仁。お国のため。——はッというので、近常さん、（阿母おつか喜んで下さい。）と、火鉢で茶を入れていたおふくろさんと、課長殿の顔を見て、濃い眉の下に露一杯。不景気だし、注文は取れず、くらしも、かつかつ。簪かんざしは銀の松葉、それはまだ上等よ。煙管きせるは真しんちゆう鍮ゆうまで承つて、裁縫たちぬいの指ぬきの、いまでも名誉の毛彫たがねの鑿がねが、針たての穴たを敲たたいていなすつたつて処だつて言いますもの、職人に取つては、城一つ、国ひとこ一郡おり、知行されたほどの、その嬉しき。——ああ、降つたる雪かな。——」

振袖は花やかに、帯の扇をぬいて開いて、片手を白く、折からこぼるる松に翳かげした。

「あとで御祝儀を遊ばせ。——法界屋の鉢の木では、梅、桜、松も縁日ものですがね、……近常さんは、名も一字、常世つねよが三ヶの庄を賜たまつたほどの嬉しきで。——もつとも、下したじ職よくも三人入り、破屋あばらやも金銀の地金に、輝いて世に出ました。仕上り二年間の見積みつもりの処が、一年と持たず、四月五月よつきといううちから、職人の作料工賃にも差支えが出来たんですつて、——それがだわね、……県庁の息が掛かつて、つなぎの資本をおろしていた大商人が、相場か何かで、がらがらと来て、美術工業の奨励、県庁のためどころではなくなつ

たんです。資本が続かないでしょう。近常さんは幾度も幾度も課長どのへ逢いに行き、縫すがつてもみたんだけれども、横へ刎はねた頬髻はが、ぐったりと下って弱っているの。人はいいんだわね、畳は汚ながつても、さ。

有志の後援を頼みにしたので、お役所にそんな金子かねの用意はなかつたんです。さあ、そうなると頼んだ職人を断るにつけて、作料を渡すにさえ、御新造ごしんさんの記念かたみの小袖。……この方はね、踊のお師匠さんでしたとき。下した方かたもお出来なすつて、……貴方お聞きなさいよ。これなんだから、天狗様に熱を吹かれているうちにも、余計に、その近常さんが鼻ひ尻いになつたんですよ。……その小袖を年一度、七夕様だわね、鼓しらべの調を渡して、小袖の土用干をなさる時ばかり、花ももみじも一時いつときに、城も御殿うらやまも羨うらやましくないとお思いなすつた、その記念かたみまで……箆たんす筒すはもうない、古葛籠ふるつづらの底から、……お墓の黒髪に枕させた、まあね……御経でも取出すように、頂いて、古着屋の手に渡りましたつて、お可哀相に。——と、さし俯うつむ向むいて、畳んだ扇子おうぎで胸むねをおさえた。撫なで肩がたがすらすらと、薄すすきのように、尾上の風に靡なびいたのである。

「お待ちないよ、この振袖。失礼ですが、……色はさめました、模様も薄くなりました。でも、それだけに、どんな事で、これがその御新造ごしんさんのお記念かたみかも知れません。……こ

の土地へ来ましてから、つい思いつきで、古着屋から買ったんですから。」

「ちよつと。」

「あら、なぜ、袖を引張らないの、持たないんです。」

多津吉は、妙に唇をゆがめながら、

「余り不躰らしいから。」

と云つた、大島の知らず、緋の羽織の袖を、居寄つて振袖の紫に敷いて熟と瞻たのであつたが、

「せめて、移り香を。」

「厭味たらしい、およしなさい、柄にもない。……じゃあ私も気障をしてよ。」

するりと簪を抜くと、ひらひらの薄が、光る鞆のように、袖と袂と重つた上へ、鬢の香を誘つて落ちた。

「しばらくそうしていらつしやい。——離れないお禁厭よ。」

「竜胆以上に嬉しいなあ。」

と、寂しそうに笑つた。

「御挨拶だわね。——狐の尻尾よ。その実は。……暗くなつたらひらひら燃えるかも知れ

ませんよ。

いえね、狐火でも欲しいほど、洋燈ランペンがしょんぼり点ついたばかり、それも油煙くすぶに燻くすぶって、近常さんの内はまた真暗まっくらになりました。……お正月がそれなんですもの。霜枯しもがれの二月をお察しなさい。お年よりは台所で寒うちの中の水仕事、乏ぜんしいお膳ぜんの跡片づけ、それも、夜のもう八時すぎ九時ぐらい。近常さんは、ほかに身の置場所のない仕事場で、さあ、こうなると酷ひどいものです。……がら落おちの相場師は、俵きおい気はあつても苦しい余りに、そちこち、玉子の黄味ぐらいまで形のついた。……」

ふと黙もくって、

「待まちって下さい、形は似にていますけれどもね、いま玉子を言いっては不可いけない。ここへ、またお使者が飛とんで来て、鶏けいの因縁いんえんになるんですから。」

「……………」

「そうね、ほんのりと雲と波なみが明あくなつたツて言いいましたよ。それツていうのが、近常さんの一代の仕事として、博覧会へ出品しようとおもくろみなすつたのが、尺まわりの円ま形がたの釣香炉つりこうろでしたとき。地の総銀一面に浮彫うきぼの波の中に、うつくしい竜宮を色で象ぞう嵌くに透すかして、片面へ、兔を走はらす。……蓋ふたは黄金無垢きんむくの雲の高彫たかぼりに、千羽鶴を透すかしぼり彫ぼり

にして、一方の波へ、毛彫の冴で、月の影を颯と映そうというのだそうですから。……

黄金の雲なんか真先よ。——銀の波も……こうなると、水盃だわね、疾のむかし、お別れになつて、灰神楽が吹溜つたような、手づくねの蠟型に指のあとの波の形の顯われたのを、細工盤に載せたのを、半分閉じた目で熟と見まもつて、ただ手は冴えても、腕は鳴つても、遣場のない鉄鎚を取りしめて……火鉢に火はなし、氷のように。

戸外は大雪よ、貴方。

……あら、簪が揺れるわ、振落そうとするんじゃないやあなくつて？……邪慳よ。そうして頂戴、後生だから。

一時、……無念、残念に張詰めた精もつきて、魂も抜けたように、ぐったりとなつたのが、はつと気が着いて、暗い間の内を見なさいますとね、向う斜の古戸棚を劃つた納戸境の柱に掛つていた、時計がないの。

時計がさ、御新造さんが、その振袖の時分に、お狂言か何かで、御守殿から頂戴なすつたつて、……時間なんか、何時だか、もう分らないんだそうですけれど、打つと、それは何ともいえない、好い音がするんです。一つ残つた記念だし、耳の遠い人だけに、迦陵頻伽の歌のように聞きなすつたのが、まあ！ ないんでしよう。目のせいか、と擦り

ながら、ドキドキする胸で、棒立ちに、仕事場を出て見なすつたそうですがね、……盗まれたに違いない。

——そういえば何だか、黒い影が壁から棚前を伝った気がする、はッ盗まれた、とお思いなさると、上下一度にがツくりと齒が抜けた気と一所に、内がポカンと穴のように見えて、戸障子も、どんでん返し——ばたばたと、何ですかね、台所の板の間を隔ての、一枚破襖やれぶすまに描いた、芭蕉の葉の上に、むかしむかしから留まっていた蝸牛かたつむりが、ころりと落ちて死んだように見えたんですとさ。……そこが真白まっしろな雪になりました……突抜に格子戸が開いたんです、音も何も聞えやしない。」

「もつともだね、ああ、もつともだとも。」

と呻うめくように多津吉は応じた。

「葉へも、白く降積つたような芭蕉の中から、頬ほおかぶり被はりをした、おかしな首をぬつと出して、ずかずかと入った男があるんです。袴はかまの股立ももたちを取っている。やあ、盗賊どろぼう——と近常さんが、さがんなさると、台所から、お媪ばあさんが。——

幕末ごろの推込おしこみじやアあるまいし、袴の股立を取った盗賊どろぼうもおかしいと、私も思つたんですけれどもさ。その股立が、きよろツとして、それが、慌てて頬被を取ると、へた

へたと叩頭おしぎをしました。（やあ、大師匠、先生、お婆々様おばさまツ。）さ、……お婆々様は気障きざだけれども、大層な奉りようなんですとさ。

柴山運八といつて、近常さんと同業、鋳屋さんだけれども、これは美術家で、そのお父とつさんというのが以前後藤彫で、近常さんのお師匠さんなんですつて。——いまは、その子運八の代で、工場を持つて、何とか閣で、大きな処を遣つてゐる。その下職人が駆込んだ使いなんです。もつとも見知合いで、不断は、おい、とつさんか、せいぜい近小父、でも、名より、目の方へ、見当をつける若いものが、大師匠、先生は……ちよつと、尋常事ただごとではないでしょう。

大切な事を頼みに来たの。

あの、大博覧会の出品ね——梶原から、この鋳職かざりやへお声がかかりがある位ですもの。美術家の何とか閣が檜舞台ひのきぶたいへ糶出せりださない筈はずはないことよ。

作は大仕掛な、床の間の置物で、……唐草高時絵からくさたかまきえの両柄ふたつえの車、——曳ひけばきりきりと動くんです。——それに臙銀台しじいちだいの太鼓に、七賢人を象嵌ぞうがんして載せた、その上へ銀の鶏を据えたんです。これが呼びものの細工ですとさ。

工芸も、何ですか、大層に気を配つて、……世の泰平をかたどつた、諫鼓かんこ——それも打

つに及ばぬ意味で……と私に分るように、天狗様は言ったんですがね。苔深うして何とかは分りませんでしたわ。……塚に苔は生えていません。」

と扇子の要で、軽く払うにつれて、弱腰に敷くこぼれ松葉は、日に紅く曼珠沙華の幻を描く時、打重ねた袖の、いずれ綿薄ければ、男の紺も、落葉に透くまで、薄の簪は静である。

「……その諫鼓とかの出品は、東京の博覧会で感状とか、一等賞とか、県の名誉になったそうです。——とところですわね、股立を取った趣は、羽にうつ石目一鑿も、残りなく出来上つて、あとへ、銘を入れるばかり、二年の大仕事の仕上りで、職人も一同、羽織、袴で並んだ処、その鶏の目に、瞳を一点打つとなつて、手が出ません、手が出ないんですとさ。(おいでを願つて、……すぐにおいでを願つて、願つて、大師匠、先生に一鑿是非とも、)と言うんだそうです。……城下でも評判だったと言いますし、師匠の家だし、近常さんも、時々仕事の中に、まあね、見学といった形で、閣へ行きなすつたものですから、鶏の工合は分つています。」

お媼さんは、七輪の焚落しを持っていらつしやる、こちらへと、使者を火鉢に坐らせて、近常さんが向直つて、(阿母、一番鶏が鳴きました。時計はのうても夜は明けま

す。……鶏の目を明けよ、と云うおおせ、しかも、師匠のお家から、職人冥加みょうがに叶かないませした。御辞退を申す筈なれども、謹んで承ります。)(おう、ようしてござれ。)(お使者つかいが、(やあ、難ありがた有いい。)(となりました。

お年よりが、納戸の葛籠つづらを、かさかさとお開けなさるのに心着けて、(いや、羽織うゑだけ、職人はこれが礼服。)(と仕事着の膝を軽くたたいて、羽織を着て、仕事場の神棚へ、拝をして、ただ一つ櫂けやきの如輪木じよりんぼくで塵ちりも置かず、拭ふきこ込んで、あの黒水晶たがねだんすのような鑿たがねだんす、何千本か艶つやつや々と透通ひきだしるような中から、抽斗ひきだしを開けて取ろうとして——(片目じやろうね。)(——ツて天狗様てんぐさまが、うけ売のうけ売で話をする癖に、いきなり大おおきな声をしたから、私びっくり吃驚びっくりした!……ちよつと、おまけに、大目玉八貫小僧おほたまやちくわんせうのように、片目を指の輪むで剥むき出すんですもの。……

職人も吃驚びっくりしましたつて、ええと聞くと、(片目は富さんが入れましたでござりませう。)(——この富さんとかいうのはね、多勢職人をつかつた、諫鼓いさめ、いさめのつづみの……今度の棟梁とうりようで、近常さんには、弟分だけれど相弟子の、それは仕事の上手ですつて。近目と貧乏は馬鹿ばかにしても、職にたずさわる男だけに、道の覚悟はありました。使者の職人は、悚ぞつとするなり、ぐつたりと手を支つきましたとき。言われる通り、たつた今、

富さんが、鶏の瞳めを入れようとして、入れようとして幾たびか、鉄鎚かなづちを持ったんだそうです。（片目は見事に入れますが、座をかえて、もう一つの目は息が抜けます、精が続かない。こうではなかつたと思うが、お恥かしい、）と、はたで何と勧めても、額から汗を流して、（兄哥あにきを頼みましょう、お迎え申して、）という事だったのを、近常さんが、ちやんと、……分っているんですもの——富に両方の目は荷に余る、しかし片目は入れたらう、とそれで、そう云つて聞いたんですわね、……凄すこかつたわ、私……聞いていて。……（いや、両方とも先生に、）というのを聞いて、しばらく熟じつと考えて、鑿たがねを三本、細くつて小さいんですとき。鉄鎚かなづちを二挺ちよう、大きな紙入の底へ、内懐へしつかりと入れて、もやもや雲の蝋ろう型がたには、鬱金うこんの切きれを深く掛けた上、羽織の紐ひもをきちんと結んで、——お供を。

道は雪あかるで明あかるいが、わざと提灯ちようちん、お仏壇の蝋燭ろうそくを。……亡き父はじめ、恋女房。……

振袖の声おもてが曇ると、多津吉も面おもてを伏せた。

「御先祖ごせんぞへも面目めいもくに、夜の錦にしきを飾りましょう。庭の砂いさいは金銀の、雪は凍った、草履よしで可よし、……瑠璃るりの扉とぼそ、と戸をあけて、碑しやくのゆきげた瑪瑙めのうの橋と、悠然と出掛けるのに、飛んで

来たお使者は朴ほおの木齒たかあしだの高下駄、ちよつと化けた山伏が供をするようだわ。こうなると先生あつかい、わぎと提灯も手に持つてき。

パツと燃え立つ毛氈もうせんに。」

夕日は言ことばに色を添え、

「鶏が銀に輝やいて、日の出の紅くれなゐなまぎの漲なみるような、夜の雪の大広間、蔭絵まきえの車がひとりでに廻めぐるように、塗膳ぬりぜんがずらりと並んで、細工場でも、運八美術閣だから立派なのよ。

鶏まんなかを真中まんなかにして、上座には運八、とそれに並んで、色の白い、少し病身らしいけれども、洋服を着た若い人で、髪を長くしたのが。」

と、顔ななめを斜ななめに見越しながら、

「貴方なんでも遣りそうな柄だわね、髪を長く……ほほほ、遣った事があるんでしよう。似合うかも知れない事よ。」

「まあ、可い。……その髪かみの長いのは。」

「東京の工芸学校へ行っている運八の息子なの……正月やすみで帰っていて、ここで鶏トリが目が入り次第、車くるまを手舄てかきで床の正面へ据たかえて、すぐに荷にこ拵しじらえをして、その宰領さいりやうをしながら、東京へ帰ろう手筈てはずだったそうですわ。……仕上りと、その出発祝たちいわいを兼ねた御馳走の

席なのよ。

末座で挨拶をして、近常さんは、すぐに毛氈の上をずつと、鶏のわきへ出なされると、運八の次に居た、その富さんが座を立つて出て、双方でお辞儀をして、目を見合つて、しばらくして、近常さんが二度ばかり黙つて頷くと、懐中の鑿ふところ たがねを出したんです。

髪の長い、ネクタイの気取つたのが、ずかずかとそこへ出て来て、

——やあ、親仁おやじ。——

——これは若旦那様。——

——僕の学校の教授がね、教授、教授がね、親仁の作を見て感心をしていたよ。どこかで何か見たんだつて。——

——東京の大先生が、はッ恐れ多い事で。——

——鑿を見せたまえ。——

——いや、くるいが出るとなりません。——

——ふうむ、何かね、鳩の目と、雀の目と、鳩……たとえばだな、鳩の目と、鶏の目と、使う鑿が違うかね。——

——はあ、鈴虫と松虫とでも違いますわ。——

一座が二十六七人、揃って顔を見合わせると、それまで、鼻の隆い、長頤を撫でていた運八が、袴のひだへ手を入れて目礼をしたんですつて。

鉄鎚をお持ちの時、手をつけていた富棟梁が、つつとあとへ引きました。

その時に近常さんは、羽織の紐を解いて……脱がないで、そして気構えましたつて。……

振袖は扇子を胸に持据えて、

「……片膝を軽く……こうね、近常さんが一方へお引きなされると。」

簪は袖とともに揺れつつも、

「簪を取った片腕を、ぴつたりと太鼓に矯めて、銀の鶏を見据えなすつた、右の手の鉄鎚とかね合いに、向うへ……打つんじやあなく手許へ弦を絞るように、まるで名人の弓ですわね、トンと矢音に、瞳が入ると、大勢が呼吸を詰めて唾をのんでいる、その大広間の天井へ、高く響いて……」

ハツと多津吉が胸を窪ませ、身を引くのと、振袖が屹と扇子を上げたのと同時であった。袖がしなつて、両つに分れた両方の袂の間が、爪さき深く、谷に見えるまで、簪の薄

の穂のひらひらと散つて落つる処を、引しめたままの扇子で、さそくに掬つたのが、かえつて悠揚たる状で、一度上へはずまして、突羽子のようについて、翻る処を袂の端で整然と受けた。

「色気はちよつと預りましようね。大切な処ですから。……おお、あつい。……私は肌が脱ぎたくなつた。……これが、燃立つようなお定まりの緋縮緬、緋鹿子というんだと引立つんですけれどもね、半襟の引きはぎなんぞ短冊形に、枕屏風の張交ぜじやお座がさめるわね。」

と擦るように袖を撫でた。その透切した衣の背に肩に、一城下をかけて、海に沈む日の余波の朱を注ぐのに、なお意気は徹つて、血が冴える。

「でも、一生懸命ですわ。——ここを話して聞かせた時のウイスキー天狗の顔色を御覧なさい。目がキラキラと光つたんです。……近常さんが、その鑿で、トンと軽く打つて、トンと打つと——給仕に来ていた職人の女房たち、懇意の娘たちまで、気を凝らして、ひっそりした天井に、大きく飴するように響くのに、鶏は、寂と据つて、毛一つも揺れなかつたそうなんですよ。鑿をきめて、熟と視ていなさるうちに、鉄鎚が柔かに膝におけると、(可。)とその膝を傍へ直して、片側へ廻つて、同じように左の目を入れたんですとさ。

……天狗の目がまた光るのよ。……

一時、ひとときり何となく陰々とした広間が、ぱつとまた明あかるくなりますとね、鶏がくるりと目を覚まして、莞爾にっこり笑ったように見えたんですつて。——天狗が、同じように笑ったから不気味でしたの。

そこへ、運八美術閣をはじめ、髪の高いのはもとよりですわね、残らず職人が、一束ねに顔を出す……寒うちの中でしよう、鼻息が白く立って、頭が黒いの。……輝く鶏の目のまわりに。

近常さんと、富さんは、その間に、双方手をつき合つて挨拶をなさいました。それから、また直ぐに、近常さんが、人の顔と頭の間で、ぐつと鶏の蹴爪けづめをおさえたんですつてね、場合が場合だもんだから、何ですか……台の車が五六尺、ひとりでにきりきりと動出すのに連れられて、世に生れて、瞳の輝く第一番に、羽搏はたき打つて、宙へ飛ぼうとする処を、しっかりと引留めたようでしたとさ。

それはね、近常さんが、もう一本の鑿たがねで、——時を造る処ですから、翼を開いていきましょう。——左の翼の端裏へ、刻印を切ろうとなすつたんです。絵ならば落款なんですわね。
 (老夫おやじ！ 何をする？) 運八がね、鉄鎚かなづちの手の揚る処を、……ぎよつとする間もなかつ

たものだから、いきなりドンと近常さんの肩を突いて、何をすると怒鳴りました。これに吃驚して、何の事とも知らないで、気の弱い方だから、もう、わびをして欲しそうに、夥間の職人たちを、うろうろとしながら、（な、なんぞ粗忽でも。）お師匠筋へ手をつくすと、運八がしやりしやりと、袴の膝で詰寄って、（汝というものは、老夫、大それた、これ、ものも積って程に見ろ。一県二三ヶ国を代表して大博覧会へ出品をしようという、俺の作に向って、汝の銘を入れる法があるか。退れ、推参な、無礼千万。これ、悪く取れば仕事を盗む、盗賊も同然だぞ。余りの大ものに見驚きして、気が違いかけたものであらう。しかし、詫びるとあれば仔細ない。一杯たらそう。）いやな言だわね、この土地じやあ、目下に、ものを馳走などする事を（たらす）ツて言うんですって、（さ、さ、さ、皆、膳につけ、膳につけ。）（いや、あの状でも名譽心があるかなあ。活きとるわけだ。）と毛の長い若旦那は、一番に膳について、焼もの大鯛から横むしりにむしりかけて、（やあ、素晴らしい鯛だなあ。）場違ですもの、安いんだわ。

沈み切っていた、職人頭の富さんが、運八に推遣られて坐に返ると、一同も、お神輿の警護が解けたように、飲みがまえで、ずらりとお並びさ、貴方。

近常さんは、驚いたのと、口惜いのと、落胆したのと、ただ何よりも恥かしさに、鑿

と鉄鎧を持ったなりで……そうでしょうね——俯向うつむいていなさいましたって、もうね、半分は、気もぼうとしたんでしようのに、運八の方では、まだそうでもない、隙を見て飛とびついで、一撃、——そこへ掛けては手錬てだれだから——一息に銘を入れはしまいかと、袴の膝こぶしに拳を握にらつて睨にらんでいる。

私なんぞ、よくは分りはしませんけれど、目はその細工の生命いのちです。それを彫いつたものの、作人と一所に銘を入れるのは、お職人の習慣ならわしだと言いますもの。——近常さんのおもいでは、せめて一生に一度——お国のため、とまで言いつて下くだすつた、県庁の課長さんへの義理、中絶なかだえはしても、資本もとでを出だした人への恩返し。……御先祖がたへの面目と、それよりも何よりも、恋女房の御新造ごしんぞうさんへ見せたさに、わざと仏壇の蠟燭を提灯に、がたくり格子るりも瑠璃とほその扉、夜の雪の凍いてた道さえ、瑪瑙めのうの橋で出なすつたのに……ほんとうにその時のお胸のうちが察さしられます。

運八の女房おかみさん——美術閣だから、奥さん——が、一人前、別にお膳を持って、自分で出ました。……ちよつと話があるんです……この奥さんは、もと藩の立派な武家のお嬢さんで、……近常さんの、若くて美男だった頃、そちらから縁談のあった事があるんですとさ、——土地の按摩はくわしいんですわね——（見染められたんだ、怪しからん。）——

そう云つて、お天狗は、それまでの氣組も忘れて、肩を大揺りに、ぐたぐたしたのよ。

もつとも、横合から、運八のものになつた事はお話しするまでもないでしょう。姿も、なよやか、氣の優しい奥さんですつて。膳をね、富さんの次へ置こうとするのを、富さんが、次へ引いて、上の席へ据えました。そして二人で立つて来て、富さんは膝を支いて手を挙げる。(さあ、ね、近常さん。)と奥さんが背中を擦るようになつて言われたので、ハツとする。鶏の涙、銀の露、睫毛の雫。——腰を立てても力のない、杖にしたような鉄鎚など、道具を懐にして、そこで膳にはついたんださうですけれど、御酒一合が、それも三日め五日めの貧の樂みの、その杯にも咽せるんですもの。猪口に二つか、三つか、とお思いなすつたのが、沈んでばかり飲むせいか、……やがて、近常さんの立ちなすつた時は、一座大乱れでもつて、もうね、素裸の額へ、お平の蓋を願巻で留めて、——お酌の娘の器用な三味線で——(蠟 螂や、ちようらいや、蠅を取つて見さいな)——でね、畳の引合せへ箸を立てて突刺した蒲鉾を狙つて踊つている。……中座だし、師匠家だし、台所口から帰る時、二度の吸ものの差図をしていなすつた奥さんが、(まあ、……さうでございますか。——お媼さんにお土産は、明朝、こちらから。……前に悪い川がありま

す、河太郎が出来ますから氣をつけてね。)お嬢さんらしいわね、むかアしの……何となく

様子を知って、心あつての言ことばでしよう。河太郎の出る、悪い川。——その台所まで、もう水の音が聞えるんですって、じゃぶじゃぶと。……美術閣の門の、すぐ向うが高台の町の崖つづきで、その下をお城の用水が瀬を立てて流れます。片側の屋敷町で、川と一筋、どこまでも、古い土塀が続いて、土塀の切目は畠はたけだったり、水田みずただったり。……

旧藩の頃にね、——謡好きのお武家が、川べりのその土塀の処を、夜更けて、松風、とかをうたつて通ると、どこかその塀の中——中ならいいんですけど、壁が口を利くように、ウウと、つけ謡でうたうんですとき。どこまでも歩行あるけば歩行くほど土塀がうたいます——余り不思議だから、熊野くまの、とかに謡いかえると、またおなじように、しかも秘曲だ——というのを謡うもんですから、一ぱし強気ごうきなのが堪たまらなくなつて駆出すと、その拍子さむらいに頭よから、ばしやりと水を浴びせられた事なんかあるんですって。……またある武士さむらいが、夜よ半なかに前へ立つ、怪あやしい女を、抜打ちきに斬りつけると、それが自分の奥方の、夢から抜出した魂たまだったりしたんですって……可いや厭やな処……

——河童かっぱは今でも居ますとき。

近常しんじょうさんは悄しよんぼり然ぼりと、そこへ台所口から敷やぶについて出て行くんです。

座敷では、じゃかじゃかじゃん……ここらは本職ほんしやくだわね。」

と、軽い撥を真似て、白い指を弾いた。

「頭の顛じゃあないけれど、額の腕の蓋は所作真盛り。——（螻蛄や、ちようらいや、蠅を取って見さいな）——裸で踊っているのを誰だと思つて？……ちよつと？」

「あ。」

多津吉は吃驚したらしい顔を上げた。渠は面も上げないで聞いたのである。

「……それがね、近常さんを、お迎に行つた職人なのよ——全体、迎に行つてから、美術閣での様子なんぞは、この職人が、いきなり（目は一つだけか。）と言われてから以來、ほんとうに大師匠だと恐入つて、あとあとまでも、悉く細く、さし合のない処でさえあれば、話すのを、按摩も、そつちこつちから、根穿り葉穿りして、聞いたんだそうですがね。——大師匠だと恐入つても、その場の事は察し入つても、飲んだ酒にも酔えば、娘むすめ子には浮かれるわ……人間ですもの。富さんが、禪まわしのみつを引張つて、（諫鼓かんこの荷づくりを見届けるまで、今夜ばかりは、自分の目は離されぬ。近常さんの途中の様子を。）（合点。）……で、いずれ、杯のやりとりのうちに、その職人の、気心が分つたんでしよう。わざと裸体に耳打ちすると、裸体に外套がいとうを引被つて、……ちつとはおまけでしようけれどもね、雪ひとすじ一条、土塀と川で、三途さんずのような寂しい河岸道へ飛出して、気を構え

て見ますとね、向うへとぼとぼと行くのが、ほかに人通りのある時刻じやなし、近常小父さん。——その向うに、こんな夜更よふけには、水の妖精ばけものが、面かおを出して、人間界のぞを覗みく水みずめ目金がねのような、薄黄色な灯が、ぼうとして、(蕎麦そばアウウ……)——と呼ぶんです。振売の時、チリンチリンと鳴りますが、似ているからって、風鐸ふうりん蕎麦と云うんだそうです。聞いても寒いわね。風鐸どころですか、荷の軒から氷柱つららが下って。

——蕎麦を一つ、茶碗酒を二杯……前後あとさきに——それまで 蝸かまぎ螂つちよが蟋蟀こおろぎに化けて石垣しががに踞すわんで、見届けますとね、熟じつと紙入を出して見ていなすったつけ、急いで勘定して、(もう一杯、)その酒を、茶碗を持ったまま、飲まないで、川岸へ雪を踏みなすった。そこに、石で囲って、段々があるんです。」

「うむ、ある。」——

と、多津吉が不意に云った。

女もうつかりしたように、

「ざぶり、ざぶりと、横瀬を打って気味が悪い。下り口の大きな石へ、その茶碗を据えなさいますとね、うつむいて、しばらく揉みなすった。肩つきが寂しいでしょう。そんなに煽切あおりきったのに、職人も蕎麦の行燈あんどんで見た、その近常さんの顔が土気色つちけだというんです

もの。駆寄ろうとする一息さきに、蕎麦屋がうしろから抱留めました。」

「難^{ありがた}有^いい。ああ、可^よかった。」

「だから、貴方は慌てものだと、云うんですよ……蕎麦屋も慌てものだわね。爺^{じい}の癖^いに。

近常さんが、（身投と間違えられましたか。）……そうではない。——（よそ様のお情で、書生をして、いま東京で修行をしている伴^{せがれ}めが、十四五で、この土地に居ますうち、このさきの英語の塾へ、朝稽古^{あさげいこ}に通いました。夏は三時^{おき}起、冬は四時^{おき}起。その夏の三時^{おき}起に、眠り眠りここを歩^{ある}行いて、ドンと躓^{つまず}いたのがこの石で、転ぶと、胸を打って、しばらく、息を留めた事がござりました。田舎寺のお小僧^{たすか}さんと、やっぱり朝稽古に通う、おなじ年頃の仲よしの友だちが来かかって、抱起したので助^{たす}つて、胸を痛めもしませんが、もう一息で、睡^{ねむ}りながら川へ流れます処。すればこの石は大恩人。これがあつたために躓^{つまず}いたのでござりませぬ。石は好^いい心持でいる処を、ぶつかったのは小児^{こども}めの不調法。通りがかりには挨拶をしましたが、仔細^{しさい}あつて、しばらく、ここへ参るまいと存するので、会釈に一献進せました。……いや思出せば、なおその昔、伴^{おなか}が腹^おに居ります頃、女房と二人で、鬼子母^{きしもじんさま}神様へ参^{おまいり}詣をするのに、ここを通ると、供えものの、石榴^{ざくろ}を、私が包から転^かがし、女房が拾^{ふと}いまして、こぼれた実を懐^{ふとこ}紙^{ろがみ}につつまながら、身体^{からだ}の弱い女でな、ここ

へ休んだ事もあります。御祝儀なしじや、蕎麦屋さん、御免なされ。は、は、は。」と、
 寂しさみそうに笑つて、……雪道を——（ああ、ふつたる雪かな、いかに世にある人の面白う
 候らん、それ雪は鷺毛がもに似て、）——と聞きながら、職人が、もうちつとと思うのに、そ
 の謡が、あれなの、あれ……」

「ええ。」

「そのおなじ謡が、土塀の中からも、嗶しゃがれ声こゑで聞こえるので、堪たまらなくなつて、あとじ
 かりをしながら、背後うしろを見ると、今居たと思う蕎麦屋が影もなしに雪に消えたので、わッ
 と云うと、荷のあつた前を山を飛越すように遁にげたんですつて。

——話は岐路えだみちになりますけれども、勉強はしたいものですわね、そのお小僧さんは、
 ずツと学問を、お通しなすつて、いまでは博士で、どこのか大学の校長さんでいなさるそ
 うです。肝心の、近常さんの伴せがれですがね。」

「伴……成程。」

「それは、から、のらくらしていて、何だか今もつて、だらしない人だつて。……（そ
 れほどの近常さん宗旨の按摩に、さつぱりひいきがないんだから、もつて知るべしだ。）
 とそう云つてね、天狗様も苦り切つていたわ。」

「大きにもつともだ。もつて知るべしだ。成程。」

「ひどく、感心するんだわね。」

「いや、何しろもつともだから。」

「まったくくだわね。」

「——そこで、どうなつたんだらう。それから。」

「お察しなさいよ……どうなる、とお思いなさるの？ あなた、なまじつか、御先祖のお位牌いはいへも面目、と思いなすつただけに、消した蠟燭ろうそくにも恥かしい。お年よりに愚痴を聞かせれば、なお不孝。ろくでなしの伴には言つたつて分らないし、それに東京へ行つていゝるし、情なさの遣場やりばのない、……そんな時、世の中に、ただ一人、つらい胸を聞かせたし、聞いて欲しほし、慰めてももらいたいのには、御新造さんばかりでしょう。近常さんは、御自分の町を隔てた、雪の小路こみちを、遠廻りして、あの川。」

と云つて、松の枝ずれに振袖がすつと立つた。——「あの橋、……」

姿の紫を掛けはせずや。麓ふもとを籠めて、練絹ねりぎぬを織つて流るる川に、渡した橋は、細く解いた鼓の二筋の緒に見えた。山の端はかえす夕映の、もみじに染まって。……

——その橋も、麓の道も、ただ白かった——と云つて袖を翻した、手も手先も、また、ちらちらと雪である。

「ちらほらここからも小さく見えますね、あの岸の松も、白い蓑を被いで、渡つておいで
の欄干は、それこそ青く氷つて瑇瑯のようです。ですけれども、真夜中ですもの、川の瀬
の音は冥土へも響きそう、そして蛇籠に当つて碎ける波は、蓮華を刻むように見えた
んですつて。……極楽も地獄も、近常さんには、もう夢中だつたんですわね。……

ついでに、あちらを御覧なさいまし。あの山の出端に一組、いま毛氈を畳み掛けて
いるのがありましょう——ああ一人酔っている。ふらふら子子のようだわね……あれか
ら、上へ上へと見霽の丘になつて、段々なぞえに上る処……ちようどここと同じくらい
な高さの処に、」

振袖姿は、塚と斜めに立つている。

「樹林がこんもりして、松の中に緋葉が見えましょう。他所のより、ずつと色の冴えま
した、ね。もう御堂も壊れ壊れになりましたし、それだし、この辺を総体にこうやって、
市の公園のようにするのにつけて、御本尊は、町方の寺へ納めたのだそうですが、あすこ
に、もと、お月様の御堂がありましたつて。……お月様の森の、もみじですもの、色は照

りますわ。——余り綺麗だから、一葉二葉、枝のを取って来たのを——天狗がですよ。白い饅頭にさして、その紅い鳥冠にしたんだって言ったんですがね。

——市から監督につけておく、山まわりの巡吏に、小酷く叱られましたとき、その二三枚葉を、つたのを。……天狗でも巡吏にはかなわないうですわね。もつとも、手でないぞ尋常なんじゃなくって、羽団扇で払いたのかも知れません。……ああ、あの、緋葉がちらちらと散りますこと。ひとりで散れば散るんですけれど。……この風の止んだ静かな山の暮方に、でもどこかそこらの丘の上から、意趣返しに羽団扇で吹かしているのかも知れません。」

兀並んだ丘は一つずつ、山深き奥へ次第に暗い。

「近常さんは、それですから幻の月の世界へ、縋りついて攀上るように、雪の山を、雪の山を、ね、貴方、お月様の御堂を的に、氷に迂り、雪を抱いて来なすって、伏拝んだ御堂から——もう高低はありません、一面白妙なんですから。（今戻ったぞ、これの、おお、この寒いに、まだ石碑さえ立てないで、面目ないが、ほかに行く処は、ようないのじゃ。）とこの塚に、熱い涙をほろほろと挨拶をなすった心の裡。……貴方、お世辞にでもお泣きなさいよ、……私も話すうちに、何ですか、つい悲しくなつて来た。」

と、眩まばゆそうに入か日に翳かす、手を洩もるる、紅くれないの露はあらなくに、睫まつげ毛は伏ふつて、霧にしめやかな松の葉より濃こまかに細い。

「いや、どうも、私も先刻さつきから、何なにだか。」

と、なぜか多津吉は肩を揺ゆつて、首うなだ垂れた。

「その時ですつて、枝も風に鳴らずに、塚も動かないでいて、このお墓はか所しょが、そのまま、近常さんの、我家の、いつもの細工場になつて、それがただ白い細工場で、白い神棚が見えて、白い細工盤おしぎが据つて、それで、白い塚が、細工盤と角を取つた長火鉢ながひばちだつたんですつて。」

多津吉は掌たなを強たく目を払はつて、熟じつと視みる。

「ですから、火も皆白いんです。鉄瓶もやつぱり白い。——その下に、焚たいてありました松の枝が、煙も立たずに白い炎で、小さな皿まんじに燃えていて、そこに、ただ御新造の黒髪くろかみばかり、お顔ばかり、お姿ばかり、お顔はもとより、衣紋えもんも、肩も、袖も、膝も真白まっしろな……幽霊さん……」

「ああ。」

「ね、ただ、お髪くしの円鬘まげの青い手絡てがらばかり、天と山との間へ、青い星が宿つたように、晁き

々らぎらと光つて見えたんですつて。

ああ、貴方、お拝みなさるの。

私も拝みたい。」

「ちよつと！……塚の前で、さしむかつて、私と並ぶと、きみが、そのまま、白くなつて消えそうあぶなで危あぶなつかしい。しばらく、もう、しばらく。」

と息いき忙せわしい。

「ええ、そうね。この振袖を、その方のおかたみかも知れないなぞと、自惚うぬぼれているうちは可いけれど、そこへ寄つて、そのお姿と並んでは、消えてしまうもおなじですわね。ちよつと、ここからお拝み申して……」

と、腰をすらりと掌てを合あわせた。

「御免遊ばせ、勝手にうわさお風説うわさなんかして。」

と、膝を折りつつ低く居て、片手に松葉を拾う時、簪かんざしを鬢しびんに挿すのであつた。

多津吉は向直つて、

「それから。」

「まあ、その銅壺どうこに、ちゃんとお銚ちやうし子がついているんじゃないやありませんか。踊のお師匠さ

んだったといひますから、お銚子をお持ちの御容子も嬉しい事。——近常さんは、娑婆も
 苦患も忘れてしまつて、ありしむかしは、夜延仕事のあとといへば、そうやつて、お若い
 御新造さんのお酌で、いつも一杯の時の心持で。……どんなお酒だったでしょうね、熱い
 甘露でしょう、……二三杯あがつたと思うと、凍つた骨、枯れた筋にも、一斉に、くら
 くらと血が湧いて、積つた雪を引かけた蒲団の気で、大胡坐。……（運八が銀の鶏……
 ではあれども、職人頭は兄弟分、……まず出来た。この形。）と雪を、あの一塊……
 鳥冠を捻り、頸を据え、翼を形どり、尾を扱いて、丹念に、でも、あらづもりの形を。—
 —それを、おなじ雪の根の松の下へお置きなされると、鑿はほんとうのを懐中から、鉄
 鎚を取つて、御新造さんと熱と顔を見合つて、（目はこう入れたわ。）丁！（左は）丁
 と打込む沓に、ありありとお美しい御新造さんの鬢のほつれをかけて、雪の羽がさらさら
 と動いて、散つて、翼を両方へ羽搏くと思つと、——けけこつこう——鶏の声がしたんで
 すつて。—

二人思わず、しかし言合はしたごとく、同時に塚の枯草の鳥冠を視た。日影は枯芝の根
 を染めながら、目近き霧のうら枯を渡るのが、朦朧と、玉子形の鶏を包んで、二羽に円
 光の幻を掛けた。

「——そう言つて、幾たびも、近常さんは臨終いまわの際に、お年よりをはじめ、気を許した人たちに、夢現うつつのように……あの霜とがの尖つたような顔にも、莞爾にっこりしてはお話しなすつたそうですね——

その何ですととき、鶏の聲が、谷々へ響いて、ズツと城下へ拡ひろがると一所に、山々峰々の雪ぎつが颯さつと薄い紫に見えたんですつて、夜よが白みしましたの。ああ、御新造さんの面影はもう見えません。近常さんは、はツと涙をお流しなすつたそうですが、もうただ悲しいばかりの涙じゃありません。可なつかし懐い、恋しい、嬉しい、それに強さ、勇ましさもまじつたのです。どうしてつて言えばね、雪をつかねた鶏の鳥冠けりが、ほんのりと桃色そまに染りましたつて、日の昇り際の、峰から雲に射さす影が映つて彩つたんです。

濃い紫に光るのは、お月様の御堂の棟。

——その頃は、こんな山の、荒れた祠ほこらですもの。お住持はなくて、ひとりものの親仁おっさまが堂守をしていましたそうです。降りつづいた朝ぼらけでしょう。雀すずめわなじやアありません。いろ鳥のいろいろに、稗ひえあわ粟を一つかみ、縁へ、供養、と思つて、出て、雪をかついで雪折れのした松の枝かと思う、倒れている人間の形かたを見つけて、吃驚びっくりして、さらさらと刻んで飛ぶと、いつもお参りをかかしなさらぬ、顔馴染かおなじみの近常さん。抱いて戻つて、介

抱をしたあとを、里へ……人橋かけるじやあなし、山男そつくりの力ですから、裸おんぶであつためながら、家へお送りはしたそうですが、それがもとでお亡くなりは、どうもせひない事でしたわね。

……ああ、また聞こえました、その時の鶏の声。……夜の蓮華の白いの、いま真青な、麓の川波を綾に渡つて、鼓の緒を捌くように響いて。

峰の白雪……私が云うと、ひな唄のようでも、莊嚴な旭でしょう。月の御堂の桂の棟そのお話の、真中へ立つて、こうした私は極りが悪い……」

と、袖を合わせた肩細く、

「御覧なさい、その近常さんは、その真中へ、両手をついて、お日様、お月様に礼拝をしたんですつて——そして、取つて、塚にのせた雪の鶏に、——お名を……銘を……」

ふと、ふつくりするまで、瞼に気を籠め、傾いて打案ずる状して、

「姓がおあんなすつたんですがね……近常さん。」

「勿論、それは、ここで、きみが天狗から聞いたんだね。」

「はあ。」

「あいにく、いまだ石碑がない。」

と、袖も寂しそうに塚に添い、葉を擦った。

「名のりは、きみが幾たびも言ってくれたので、まぎまぎと、その顔も容子も、眉毛まで見えるように思われてならないよ。」

「どうして思出せないんでしょう。いいえね、あの、近常さんの方は、——一字、私の名が入っていたので、余り覚えよかつたもんですから……」

「ああ、お近さん。」

「常で沢山。……近目のようで可厭ですわ、殿方と違いますもの——貴方は？」

「いや、それがね、申しおくれた処へ、今のような真剣の話の中へは、……やくざ過ぎて、言憎い。が、まあ、更めて挨拶しよう。——話をして、それから、その天狗はどうしたね。」

「この山は、どういうものか、雑木林なり、草の中なり、谷陰なり、男がただひとりで居ると、優しい、朗かな声がしたり、衣摺れが聞こえたり、どこからともなく、女が出て来る。円鬚もあるうし、島田もあるうし、桃の枝を提げたのも、藤山吹を手折つたのも、また草籠を背負つたのも、茸狩の姉さんかぶりも、それは種々、時々だというけれど、いつも声がして、近づいて姿が見える——とそういうのが、近国にも響いた名所だ。」

町に別嬪べっぴんが多くて、山遊びが好きな土地柄だろう。果して寝転んでいて、振袖を生捉いけどつた。……場所をかえて、もう二三人捉つかまえよう。——（旅のものだ、いつでもというわけには行かない。夜を掛けても女を稼かせごう。）——厚かましいわ。鱗うわばみに吞のまれたそうに、元頭はげあたまをさきへ振つて、ひよろひよろ丘の奥へ入りました。」

「ただものでない、はてな。」

多津吉は確しかと腕こまぬを拱こまぬいた。

「何しろ、これは、今の話の様子だと、——故人たがねが藪たがねで刻たがねんだという、雪をつかんだ鶏けいの鳥冠ひに、旭ひのさしたのを象徴かたどつたものだ。緋葉もみじもなお濃い。……不思議なもののような気がする。ただの白い饅頭まんとうでは断じてない。はてな。」

と、のぼして触れようとした手を、膝こぶしに拳こぶしして、固こくなって控こえた。

「天狗が気になる。うっかり触ると消えはしないか。」

「消えれば口の中ですわ。……祝儀をくれない天狗なんか。」

姉さん、ここはばらがきで、

「私にやろう……と云ったんですもの。ほんとうの天狗の雛ひよ子こだつて。」

また奇妙に、片袖をポンと肩に掛けて、多津吉の眉の前へ、白い腕あわわを露呈あらわに、衝つとかが

み腰に手を伸ばして、ばさりと巢を探る悪戯のように——指を伏せても埒あく処を——
両手に一つずつ饅頭を、しかし活ものごとくふわりと軽く取った。

立直った時である。

「あらあら火事が。」

多津吉もすつくと身を起した。

「また火事か！——いや、火事じゃない。あれは、あすこに、大きな坊さんの銅像がある。
それに夕日が当るんだよ。」

月の御堂のあとという、一むらの樹立、しかも次第高なれば、その梢にかくれたのが、
もみじを掛けた袈裟ならず、緋の法衣のごとく燦と立った。

水平線上は一脈金色である。朱に溶けたその波を、火の鳥のように直線に飛んで、真
面に銅像を射たのであった。

しばらくして、男女は、台石の巖ともに二丈六尺と称するその大銅像の下を、一寸ぐら
いに歩行していた。あわれに小さい。が、松と緋葉の中なれば、さすらう渠等も恵まれて、
足許の影は駒を横え、裳の蹴出しは霧に乗って、対の狩衣の風情があった。

——前刻、多津吉のつれの女が、外套を抱えたまま振返って、上を仰いだ処は、大造りな手水鉢を境にして、なお一つ展げた原の方なのである。——

振袖が朗な声して、

「まあ、貴方、なぜおじぎをなさらないの。さつきは、法界屋にも、丁寧に御挨拶をなすつたのに、貴いお上人さんの前にさ——」

「おちかさん。」

多津吉は、盥のごとき鉄鉢を片手に、片手を雲に印象した、銅像の大きな顔の、でっぴりした頤の真下に、屹と瞳を昂げて言った。

「……これは、美術閣の柴山運八と、その子の運五郎とが鑄たんだよ。」

波頭、雲の層、累る蓮華か、象徴った台座の巖を見定める隙もなしに、声とともに羽織の襟を払って、ずかと銅像の足の爪を、鳥の嘴のごとく上から覗かせて、真背向に腰を掛けた。

「姓は郡です……職人近常の。……私はその伴の多津吉というんだよ。」

「ああ多津吉さん。」

その肩を並べて、莞爾して並んで掛け、

「まあ、嬉しい……御自分で名を言つて下すつたのは、私の占筮が当たつたより嬉しいわ。そうして占筮は当りました。この大坊主つたら、一体誰なんです。」

と肩を一層、男に落して、四斗樽ほどの大首を斜めに仰ぐ。……俗に四斗樽というのは蟒の頭の形容である。濫に他の物象に向つて、特に銅像に対して使用すべきではない。が、鑄たものが運八父子で、多津吉の名が知れると、法界屋の娘の言葉も、お上人様が坊主になつた。

「……橋の上、大通りの辻……高台の見霽と、一々数えないでも、城下一帯、この銅像の見えることは、ここから、町を見下ろすとおんなじで……またその位置を撰んで据えたのだそうだから、土地の人は御来迎、御来迎と云うんだね。高山の大霧に、三丈、五丈に人の影の映るのが大仏になつて見えるというのにたとえてだよ。勿論、運八父子は、一度聞けば誰も知らぬものがない、昔の大上人としてこれを鑄たんだ。——不思議に、きみはまだ知らないようだけれど、五つ七つの小児に聞いても、誰も知らぬものはなからうね。」

「蓮如さん、」

「さあ、」

「親鸞上人。」

「さあ、」

「弘法大師。」

「さあ、それが誰だつて、何だつて、私は失礼をする気は決してないんだ。ただ運八父子の手に成つた……」

「勿論ですわ。——法界屋にお辞儀をなすつた方が、この木菟入道に……」

おお、今度は木菟入道。

「挨拶をなさらないのは。——あなた、私ね、前刻通りがかりに、一度拝んだんですよ。御利益はちつともない。ほほほ、誰がこの下で法界屋を唄わせたり、勿ねさせたりするものがありますか。そんな事より、ただ大きな、立派なもの……もつとも、むくみが来て、ちつとうだばれてはいますがね。」

脊筋を捻じて、台座に掛けた秋の蝶の指の細さ。

「御覧なさい。余計な耳を押立てて、垂頬で、ぶよぶよツちやアありやしな。……でも場所が場所だし、目に着くことといつたら、国一番この通りですからね。——この鶏を。」

……包みもしないで——翠を透かして、松原の下り道は夕霧になお近いから——懐

紙がみに乗せたまま、雛菓子ひながしのように片手に据えた。

「あなた、折角、私がおさがりを頂いたんですからね、あの塚から、」

その古塚は、あわれ、雪に埋れた名工と、鼓の緒の幻の陽炎かげろうに消えた美女のおくつきである。

「二羽巣立をして、空へ翔かけるように、波ですか、雲ですか、ここへ備そなえようと思って持つて来たんですけれどもね、——ふふんだ、誰が、誰が……」

頸うなじを白く、銅像に前髪をバラリと振った。下唇の揺れるような、烏冠とさかの緋葉もみじを、一葉ひとはぬいて、その黒髪に挿したと思うと、

「ああ、おいしい。」

早い事。

「なかなか、おいしい。天狗の雛児ひよっこ。——あなたも一つめしあがれ。」

「……………」

「あら、卑怯ひきよつなことね、お毒味は済んでるのに。」

と、あとのに、いきなりまた皓齒しろはを当てると、

「半分を、半分を、そのまま、口から。」

と、たとえば地蔵様の前に地獄の絵の生首を並べた状に、頸を引抱えた、多津吉の手を、ちよつと遁げて、背いて捻った女の唇から、たらたらと血が溢れた。

一種の変相と同じである。

「や、中毒つたか。」

と頬に頬をのしかかつて、

「毒でも構わん、一所に食べよう。」

「あいつつ。」

と、眉を擡めた。松葉が睫毛に掛つたように。

「噛みはしない、噛んだか。いや噛んだかも知れない。きみに詫びる。謝罪する。……失礼だがきみの、身分を思つて……生半可の横啣えで、償いの多少に依りさえすればこ

んな事はきつと出来ると……二度目にあの塚へ、きみが姿を見せた時から、そう思った。

悪心でそう思った。——ここへ連れて来て、銅像の鼻前で、きみの唇を買つて、精進

坊主を軽蔑してやろうと思つたんだ。慈悲にも忍辱にも、目の前で、この光景を視せられて、侮辱を感じないものは断じてないから。——うむ、そうだ。坊主を軽蔑する本心に

も手段にも、いささかもかわりはない。が、きみに対して、今は誓つて悪心でない、真心

だ。真実だ。許してくれ。そして軽蔑さしてくれ。」

「はなして……よ。」

しかも、打うちつぶるばかりの双のまぶたのまぶたは、細く長く、たちまち薬研のようになって、一点の黒き瞳が恍惚と流れた。その艶麗なる面の大きさは銅像の首と相あひひつ。男の顔も相あひひつ。大悪相を顕じたのである。従つて女の口を洩るる点々の血も、彼かしこに手洗水に湧く水脈に響いて、緋葉をそそぐ滝であつた。

「あ。」

「痛い、刺さつて、」

「や、刺とげか。」

けだものの顔は離れた。が、女の影は鳥のように地に動いて、裾は尾を細く、すつと緊しまる。

「何でしょう。」

衝と懐紙に取つたを見よ。

「あら、大きな針……まあ釘よ。……」

「釘？」

と、多津吉は眉を寄せつつ、かえつて忘れてでもいるような女の手から、その疵きずつけた

ものを撮み取つて凝と視ると、視るうちに、わなわなと指が震えた。

「父親の整だ。」

「ええ、近常さんの……」

「見てくれたまえ——この尖へ、きみの口の裡の血がついて。」

絹糸の縫れの紅いのを、衝と吸う端に持ちかえた。が、

「もとの処に、これ、細い葉を二筋と、五弁の小さな花が彫つてある。……父親は法華宗のかたまり家だったが、仕事には、天満宮を信心して、年を取つても、月々の二十五日には、きつと一日断食していた。梅の紋を、そのままは勿体ないという遠慮から、高山に咲く……この山にも時には見つかる、梅鉢草なんだよ。この印は。——もつとも、一心を籠めた大切な整にだけ記したのだから。——これは、きみの口から聞かしてくれた……無論私も知つている……運八のために、その一期の無念の時、白い幽霊に暖められながら、雪を掴んで鶏の目を彫込んで、暁に息が凍つた。その時のものかも知れない……知れないと、私は、私は思うんだ。」

「違いありませんよ、きつと、きつとそうに。——ですもの、生きてるような白い饅頭が、それも、あとの一つの方は、口へ入れると、ひなひなと血が流れるように動いたんですの。

……天狗のなす業わざだわね。お父さんのその鑿おやじで、どうしたら可いいでしょう、私こわしいわ。何ですか、震えて来た。ぞくぞくして。」

「笑つてくれたもうなよ、私には一人の父親おやじだ。」

鑿おやじをば押頂しかき、確ふところと懐ふところ中に挿入れた。

「風来もので、だらしはないがね、職人の子だから腹巻しを緊しめている。」

と突入そびれつつも肩が聳そびえ、

「まったく、ぞくぞくもしよう、寒気もしよう、胸も悪きたなかろう、唇も汚きたならしかろう。堪忍してくれましたまえ。……そのかわり、今ね、憤おこるなよ……お転婆おこな、きみが嬉おこしがる、ぐつとつかえが下つて胸の透く事おこをしてお目に掛ける。——

そこいらの連中も、よく見ておけ。」

と、なだらに下る山の端はに瞳はを向けた。が、行きつれ、立ち交る人影は、みなおり口の阪へ行く。……薄おやじき海の光の末に、鳥の立迷う風情であつた。

「ちかさん、父親おやじを鼻ひいき肩めくらの盲人めくらにさえ、土地に、やくぎものに見離めくらされた……この故郷へ、何のために帰るものか。」

意気は独り激しそうだ。が、する事はだらしが無い。外套は着ていなかった。羽織さばを捌さば

いた胸さがりの角帯に結び添え、希くは道中師の、上は三尺ともいうべき処を、薄汚れた紺めりんすの風呂敷づつみを、それでも緊と結んだと見えて、手まさぐると……

「解いてあげましょうか。」

「いや、大丈夫。……きみたちは知るまいなあ。——むかしここいらで、小学校へ通うのに、いまのように洒落た舶来ものは影もないから、石盤、手習草紙という処を一絡めにして……武者修行然として、肩から斜っかけ、そいつはまだ可いがね、追々寒さに向つて羽織を着るようになるこの態裁です。——しかし膚に着けるにはこれが一等だ。震災以後は、東京じゃ臆病な女連は今でも遣つてる。」

と云つて、膝の上で、腰弁当のような風呂敷を、開く、と見れば——一挺の拳銃。

晃然と霜柱のごとく光つて、銃には殺気紫に、蒼める青い竜胆の装を凝らした。筆者は、これを記すのに張合がない。なぜというに、咄嗟に拳銃を引出すのは、最新流行の服の衣兜で、これを扱うものは、世界的の名探偵か、兇賊かでなければならぬ。だからである。……但し、名探偵か、兇賊でさえあれば、それが女性でも差支えない事は註に及ばぬ。

風呂敷には、もう一品——小さな袖姿見があつた。もつとも八つ花形でもなければ柳

鶺鴒ゆうじやくよそおひの装があるのでもない。単に、円形の姿見である。

おんな 婦も、ちつと張合のないように、さし覗のぞき、両の腕かいなを白々と膝に頬杖した。高島田の空に、夕立雲の蔽おほえるがごとく、銅像の覆掛のしかかった事は云うまでもない。

「……玩弄品？」

「怪けしからんことを——由緒は正しく、深く、暗く、むしろ恐るべきほどのものだよ。」
と、片手に撓ためて、袖に載せた拳銃ピストルは、更に、抽取ぬきとった、血のままなる狼おおかみの牙きはのよう
に見えた。

「銅像の目を射るんだ——ちかさん。」

「あら、」

思わず軽く手を拍たたくと、衝つと寄せた、刻んだような美しい鼻を、男の肩に、ひたと着けて、

「いいわねえ、賛成。……上手に射てますか。」

その口振くちぶりは、ややこの器うつわに馴なれたものようでもある。

「信ずるんだ。腕じゃあない、この拳銃ピストルを信ずるんだよ。——聞きたまえ、ここにこの銅像を除幕してから、ほとんど十年になる。これが各国に知れた頃から、私は目を射る事

を、遥はるかにまた遠く心掛けた。しかし、田舎まわりの新聞記者の下した端っぱじゃあ、記事で、この銅像を礼讃することを、——口惜くやしいじゃあないか——余儀なくされるばかりで。……射バット的で蝙蝠バットを落す事さえ容易たやすくは出来ないんです。

おなじく、地方を渡り歩あ行くうちに、——去年の秋だ。四国土佐の高知の町でね……ああ、遠い……遥はるばる々々として思われるなあ。」

海に向つて、胸を伸ばすと、影か、——波か、雲か、その台座の巖いわを走をる。

「南京出刃打なんきんでぼうちの見世物みせものが、奇術にまじつて、劇場に掛かつたんだよ。まともには見られなような、白い、西洋の婦人おんなの裸身が、戸板へ両腕を長く張つて、脚を揃かえて、これも鎧かすがいで留めてある。……絵で見るような、いや、看板だから絵には違ちがい……長剣を帯びて、緋羅紗ひらしやを羽被はつた、帽子もお約束の土耳古トルコ人が、出刃でじやない、拳銃ピストルで撃うっているんだ。この看板を視みて立つたと云うのさえ、しみたれた了りようけん 筒けんをさらけ出すようで、きみの前まへで言うのもお恥かしいがね、……さいわい夜だ、大して満員でもなさそうだから切符を買かつた。が、目的はただ一つなんだからね、（拳銃ピストルはまだかね、）と札口で聞いたが、（え、）と札売の娘は解わかりかねる。（南京の出刃打は、）とうっかり言いつて、（お目当はこれからですよ。）には顔から火が出た。いま、きみに対しても汗が出る。

——悪くまた二階の正面に連れられて、いわゆるそのお目当を見たんだが、悉くは云うにも及ばないけれど、……若いお嬢さんさ、その色の白いお嬢さん——恩人だし、仙女、魔女と思うから、お嬢さんと言うんです。看板で見たようなものじゃあない。上品で、気高いくらいだね。玉とも雪とも、しかもその乳、腹、腰の露呈なことはまた看板以上、西洋人だし、地方のことだから、取締も自然寛かなんだろう。……暗い舞台に浮出して、まったく、大理石に血の通うと云うのだね。——肩、両眼、腰、足の先と、膚なりに、土耳其人が狙って縫打に打つんだが、弾丸の煙が、颯、颯と、薄絹を掛けて、肉線を絡うごとくに、うつくしい顔は、ただ彫像のようでありながら、乳に手首に脈を打つ。——見てはいられない処を、あからめもせず瞻つたのは、土耳其の……口上が名のつた何とかパシヤの拳銃の、その鮮かな手錬なんです。繕つて言うのじゃあないが、それを見るのが目的だった。もう一度、以前、日比谷の興行で綺麗な鸚鵡が引金を口で切つて、黄薔薇の莖を射て当てて、花卉を円く輪に散らしたのを見て覚えている。——扱人は、たしか葡萄酒牙人であつたと思う。

いなか記者の新聞摺れで、そこはずうずうしい、まず取柄です。——土耳其人にお鮓もおかしい、が、ビスケットでもあるまいから、煎餅なりと、で、心づけをして置いて、

……はねると直ぐに楽屋で会った。

私はいきなり跪ひざまずいたよ。むこうが椅子でも、居所は破やれた畳たたみです。……こう云うと軽薄

らしいが、まったくの処……一生懸命で、土間でも床でも構う氣じやなかった。拳銃ピストル皆伝の一軸、極意の巻ものを一気に頂こうという、むかしもの語りの術讓りの処だから。私から見れば黄石公——壁に脱いだ、緋ひの外がい套とうは……そのまま、大天狗の僧正坊……」

多津吉は銅像の腰を透かして、背後うしろに迫つて、次第に暮れかかる山の寂寞せきぼくさを左右に視みたが、

「燕尾服えんびふくの口上が、土地の新聞社という処で、相当にあしらつてくれる。これが通訳で……早い処……切に志を陳のべたんだ。けれども、笑つてばかりいて、てんで受付けません。また土耳其人のこういう半狂氣はんきちがいに対する笑い方といったら、一種特別不思議でね、第一おおき大な鼻の鼻筋の、笑わらい皺じわというものが、何とも言えない。五百羅漢ごひやくらかんの中にも似たらしい形はない。象の小父さんが、噓くさめをしたようで、えぐいよ。

鼻で巻いて、投出されて、怪飛けしとんでその夜は帰った。……しかし、氣心の知れた丑うしの時とき参詣まいりでさえ、牛の背を跨またぎ、毒蛇の顎あごを潜くぐらなければならぬと云うんです。翌晩ひざまずまた跪ひざまずいた。が、今度は、おなじ象の鼻で、反対に、背うしろ向むきに勿はねられたんだね、土耳其人は

向うむきになつて、どしどし楽屋を出ちまつたよ。刎ねられ方は簡単だけれど、今度は昨夜より落胆うべ がっかりした。——実はうっかり言うまいと思つたけれど、そうもしたらばと、よもやに引かされ、その拳銃の極意を授けられたい、狙う目的と、その趣意を、父の無念ばらしの復讐のために銅像の目を狙うことを打明けたんだから——だ。が、何にもならない。興行は五日間——皆通つた。……もう三度めからは会つてもくれない、寄附よせつけません。しかも、打方を見るだけでも、いくらか門前の小僧だ、と思つて、目も離さずに見たんだが、この目の色は、外国人が見ても、輪を掛けて違つていたに相違ない、少々血迷つてる形です。——

楽らくの晩だ。板いた礫はりつけの、あともう一場、賑にぎやかな舞踏がある。——帷幕まくが下りると、……燕尾服の口上じやない——薄汚い、黒の皺だらけの、わざと坊さんの法衣ころもを着た、印度人インドが来て、袖を曳ひいて、指ゆび示さしをしながら、揚幕へ連れ込んで、穴段を踏んで、あの奈落……きみもよく知つていようが、別いなして地方劇場なかいの奈落だよ。土地柄でも分る、犬神の巢すの魔窟だと思えば可い。十年人の棲すまない妖怪邸ばけものやしきの天井裏にも、ちよつとあるまいと思ふ陰惨とした、どん底に——何と、一体白身の女神、別べつ嬪びんの姉さんが、舞台の礫の時より、研ひいだようになお冴さえて、唇ひももに緋桃ひももを含んで立つていた。

つもつても知れる……世界を流れ渡る、この遍路芸人も、楽屋風呂はどうしても可厭だと云つて、折たたみの風呂を持参で、奈落で、沐浴をするんだそうだっけ。血の池の行水だね、しかし白蓮華は丈高い。

すらりと目を晒して、滑かに伸ばす手の方へ、印度人がかくれると、（お前さんに拳銃を上げましょう。）とこう言うんだ。少しは分る。私だつて少々は囁る。——土耳其の鼻を舐めた奴だ、白百合二朶の花筒へ顔を突込んで、仔細なく、跪いた。——ただし、上げましょう拳銃を——と言う意味は——打方を教えよう——だとばかり思つたのに、乳の下藤色のタオルのまま、引寄せた椅子の仮衣の中で、手提をパチリとあけて……品二つ——一度取上げて目で撓めて——この目が黒い、髪が水々とまた黒い——そして私の手に渡すのが、紫水晶の笄と、大真珠の簪を髪からぬき取つたようだった。……

——ちかさん、この、袖姿見と拳銃なんだよ。」

女は息を引いて頷いた。

男が、島田の勿元結の結目を压えた。

「ここを狙え、と教えたんだ。」

「あ。」

「御免よ。うつかり……」

「ああ、元結が切れそうだった。可厭ね、力を入れてさ。」
と邪慳じやくけんに云つて優しく視た。

「土耳古人が、頤あご、咽喉下のどしたから、肩、順々に——最後に両方の耳の根を打つ。最々後に、絶対の危険を冒す全世界の放れ業だ、と怯おびかして、裸身の犠牲の脳頭のうてんを狙う時は、必ず、うしろ向きになるんだよ。うしろ向きになって、的の姉さんを袖姿見てかがみに映して狙いながら、銃口つづぐちを、ズツと軽く柔やわらかに肩に極きめて、そのうしろむき曲打にズドンと遣るんだ。いや、肝を冷す。（教えよう）——お嬢さんが、私にその通りに遣れ、と云うんだ。（少し離れて、もう少し、立った爪尖まで、全身がはつきり映るまで、）とさしずをされて、さあ……：一間半、二間足らず離れたらうか。——牛馬の骨皮を、じとじと踏むような奈落の床を。——裸の姿に——しかも素馨そけいの香に包まれて。

——きみの前だが、その時タオルも棄てたから一糸も掛けない、浴後ゆあがりの立姿だ。……私はうしろ向きさ。（拳銃ピストルを肩あてに当よ、）と言う、（打とうと思う目をお狙い……）と云う、口が苦いまで、肝を嚙かんで、熟じつと視たが、わなわなと震えて、あつと言つて振り向いた。屹きつとなつて、（教えません、そんな事では——不可いけません、）と言われたが。蛇です、

蛇です、蛇です、三足^{びき}。一尺ぐらいつつ、おなじほどの距離を置いて、蜘蛛^{くも}の巣と、どくだみの、石垣の穴と穴から、によりりと鎌首を揃えたのが、姉さんの白い腰に、舌をめらめらと吐いているんじゃないか。——歴々^{ありあり}と袖姿^{てかがみ}見に映つたんだ。

心もち肩を落して、乳房を抱いたが——澄ましてね、これらの蛇は出て来るんじゃないやあない。遁^にげて引込^{ひっこ}むんだから心配はない。——智慧で占つたのではない事実だ、と云うんだ。湯を運ぶ印度人が、可^{おそろし}恐く蛇ずきの悪^{いたずら}戯で、秋寂^{あきさび}びた冷気に珍らしい湯のぬくもりを心地よげに出て来る蛇を、一度に押えてせつちようして、遁^にげ込む石垣の尾を二足も三足も引^{ひき}掴^{つか}み、引^{ひき}掴^{つか}み、ぬき出しは出来なかつたが、断^{ちぎ}れたら食^くかねない勢^{いきおい}で、曳^ひ張^{っぱ}り曳^ひ張^{っぱ}りしたもんだから、三日めあたりから——蛇は伶俐^{りりょう}で——湯のまわりにのたつていて、人を見て遁^にげるのに尾の方を前^{さき}へ入れて、頭を段々に引^ひ込^こめる。（世のはじめから蛇は智者ですよ。）と言う。まったく、少しずつ鱗^{うろこ}が縮んでぬるぬると引込んで、鼠の鼻ツさきが挟^{はさ}まったようになつて消えたがね。奴等の、あの可^{いや}厭らしい目だの、舌の色が見えるほど、球一つ……お嬢さんは電燈を驕^{おご}つていてくれたんだ——が、その光さえ、雷^{いなびかり}光か、流星のように見えたのも奈落のせいです。

遣^{やり}直^{なお}して肝を嚙^かんだ。——（この瞬^みつた目が、袖姿^{てかがみ}見の裡^{うち}のこの瞬^みつた目が、瞬^{まばた}いた

と思う、その瞬間を射るんです。同じようにして、うしろ向きに凝視（みつ）めていれば、瞬（ひら）く
と思う感じがその銅像の場合にも顕（あら）われる。魔の睫毛（まつげ）一毫（ひとすじ）の秒（ま）がきつとある。そこを射
よ、きつと命中（あた）る！ 私（わたし）も世界を廻（まわ）るうちに、魔の睫毛（まつげ）一毫（ひとすじ）の秒（ま）に、拙（へた）な基督（キリスト）の像の目
を三度射た、（ほほほ、）と笑つて、（腹切、浅野、内蔵之助（くららのすけ）——仇（かたきうち）討（う）ちは……おおい
厭（いや）だけれど、復讐（しかえし）は大好き——）しっかりその銅像の目をお打ちなさいよ。打つ礫（つぶて）は過（あやま）つ
てその身に返る事はあつても、弾丸（たま）は仕損（たま）じてあなたを損（あ）いはしません。助太刀（すけだち）の志（こころ）で
す。——上着（じやうぎ）を掛けながら、胸（むね）を寄（よ）せて、鳴（な）をしてくれました。トタンに電燈（でんとう）を消（け）した
んです。（魔の睫毛（まつげ）一毫（ひとすじ）の秒（ま）でしたわね、）浪（なみ）を行（い）く魚（うお）、中空（なかぞら）を飛（と）ぶ鳥（とり）に、なごりを惜（おし）
むものではありません——流星（りゅうせい）は宇宙（うちゅう）に留（とど）つても、人の目に触（ふ）るるのはただ一度（いち）ですもの、
と云（い）つて、……別（わか）れました。

別（わか）れました。その姉（あね）さんには別（わか）れた、が、きみとは別（わか）れまいね。」
と云（い）つた、袖姿（てかがみ）見（み）は男（おとこ）の胸（むね）に、拳銃（ピストル）（ピストル）は女（おんな）の肩（かた）に掛（か）つたのである。

御手洗（みたらし）を前（まへ）にして、やがて、並（なら）んで立（た）つた形（かたち）は、法界屋（ほふかいや）が二人（ふに）で屋台（やたい）のおでん屋（おでんや）の暖簾（のれん）
に立（た）つたようである。じりじりと歩（あ）を刻（き）んで、あたかもここに位置（いち）を得（え）た。袖姿（てかがみ）見（み）は、瞳（ひとみ）

のごとく背後うしろざまに巨なる銅像を吸った。拳銃ピストルは取直され、銃じゅうせん尖せんが肩かたから覗のぞいた：
 …磨いた鉄鎚かなづちのように、銅像の右の目に向ったのである。

さすがに色をあらためて、

「気味が悪かろうとは、きみだから言わない——私が未熟だから、危いから、少し、そちらへ。」

「着ものを脱いで、的にも立ちかねないんですがね。」

と、自若として、微笑ほほえみながら、

「あなたの柄だと、私は矢取やどりの女のようにだよ。」

「馬鹿な事を——真剣だ。」

「あなた。」

と面かおを引ひきし緊きしめた。

「……………」

「一つは射うてますわね。……魔のお姫様の直伝ですから。……でも、音がするでしょう、拳銃ピストルは。お嬢さんが耶蘇ヤソウの目を射た場所は、世界を掛けての事だから、野も山もちつと……ことは違うようです。目の下が、すぐ町で、まだその辺に、人は散り切りません。天狗

が一二枚もみじの葉を取ったつて、すぐ山巡吏の監督が出て来るんじやアありませんか。——この静さしずかじや、音は城下一杯こたまに飮くだまします。——私にその鑿たがねをお貸かしなさいな。」

「鑿を。」兇悪をなすに、責せめを知つて、後事を托たくせよと云うがごとく聞えて、頷うなずいて渡した。

「拳銃ピストルをお見せなさいな。」

「……拳銃を。成程、引續けて二度狙うのは、自信がない、連発だけれども、」

空くうを打たれて、手練てだれに得ものを落されたように——且つ器械しちを検しらべようとする注意だと思つたように、ポカンと渡すと、引取るが疾はやいか、ぞろりと紅の裄くれないつまを絞つて小褌こはかをきりきりと引上げた。落葉が舞つた。颯つむじかせ風かぜに乗るように振袖はふつと浮いて衝つと飛んで、台座に駆上ると見ると、男の目には、顔の白い翡翠かわせみが飛ぶ。ひらひらと銅像の鬘むだを踏んで、手がその肩かかに掛つた時、前髪まえがみのもみじが、薄すすきんざしの簪かんざしを誘つて、中空ひるがえに翻ひるがえるにつれて、はじめ、台座に揃そろえて脱だいだ草履ぞうりが山へ落ちた。

「あ、あ、あ、あんなものが、ああ、運五郎、伴せがれ、運五郎、山の銅像に天人あまくだが天降あまくだつた、天降あまくだつた。おお、あれは、あれは。やあ、大きな縞しまへび蛇へびだ。運五郎、運五郎。——いや、

鳥だ、鳥だ。……青い、白い縞が、紅い羽もまじった。やあ嘴で目をつつく。」

銅像が、城の天守と相對して以來、美術閣上の物干を、人は、物見と風説する。……男女の礼拝、稽首するのを、運八美術閣翁は、白髮の総髮に、ひだなしの袴をいつもして、日和とさえ言えば、もの見をした。馴れて、近来はそうまでもなかつた処に、日の今日は、前刻城寄の町に小火があつて、煙をうかがいに出たのであるが、折から小春風の夕晴に、来迎の大上人の足もとに、ぬかごのごとく人のゆききするのを、心地よげに、久しぶりに見惚れていた。もつともその間に、遊廓の窓だの、囲いものの小座敷だの、かねて照準を合わせた処を、夢中で覗く事を忘れない。それにこの器は、新式精銳のものでない。藩侯の宝物蔵にあつたという、由緒づきの大な遠目金を台つきで廻転させるのであるから、いたずらものを威嚇するのは十分だが、慌しく映るものは——天女が——縞蛇に

——化鳥に——

またたちまち……

「やあ、轆轤首の女だ、運五郎。」

ドシンと天狗に投げられたように、翁は物干に腰をついた。

島田の鬢びんの白い顔が、宙にかかり、口で銅像の耳を噛かんで踏ふみこる棲つまの紅べにを、二丈六尺、高く釣りつつ、鑿たがを右の目に当てて、雪の腕かひに、拳ピストル銃を、鉄鎚かなづちに取かつて翳かした。

銅像の左の目は、同じ様にして既に一撃を加えた後である。

まことや、魔の睫毛まつげ一毫ひとすじの秒まに、いま、右の目に鑿たがを丁と打うつたと思うと、

「キイー」

と声の糸を切きつて、振袖は銅像の肩から、ずるずるとこぼり落ちた。あわや台座に留すまろうとして、術わざの施せす隙ひまなき状さまに、そのまま仰あ向けに黄昏たそがれの地に吸すわれたが、白脛しろはぎを空そらに土を蹴けて、棲つまをかくして俯うつむけになつて倒れた。

読者の、もの狂くるしく運く八翁わが、物見から、弓矢で、あるいは銃で、射留めた、と想像さるるのを妨さげない。弾丸たまのとどかない距離をまだ註つしてはいなかったから。いわんや、翁は、旧藩の士族の出であるものを。

「——事実を言おう、口惜くちおしいが、目が光あつたんだ。鑿たがで突き潰つぶすと、銅像の目が大きく開いて光あつたんだ。……女は驚おどいて落ちこんだ。」

多津吉は、手足を力なく垂れた振袖を、横抱よこかきに胸むねに引緊ひきしめて、御手洗みたらしの前に、ぐたり

として、蒼くなつて言つた。

銅像の肩から転落した女を、きつけの水に抱込んだのはほとんど本能的であつたといつて可い。しかし、鬢も崩れ、髪も濡れて、二人とも頭から水だらけになつてゐるのは――

――「ベツ、此奴等、血のついた屑切なんか取散らかして、蛆虫め。――この靈地をどうする。」

自動車の助手に、松の枝を折らせ、掃立てさせた傍ら、柄杓を取つて、パツパツと水を打つついでに、頭ともいわず肩ともいわず、二人に浴びせかけたのは、銅像の製作家、東京がえりの長髪の運五郎氏で、閣翁運八とともに、自動車で駆上つて来た事は更めて言うに及ぶまい。事實に逢着すると、着弾の距離と自動車の速力と大差のない事になる。自動車の方が便利である。

侮辱と唾棄の表現のために、刎ね掛けられた柄杓の水さえ救のしたたるか、と多津吉は今は恋人の生命を求むるのに急で、焦燥の極、放心の体でゐるのであつたが。

「近視の伴が遣りそうな事だわい。不埒ものめが。……その女は、そりや何だ。」
袴腰に両腕を張つて覗込む、運八翁に、再び蒼白い顔を振上げた。

「門附芸人です、僕の女房です。」

「う、う、おお、似合うたな、おなじように。」

「ああ、お父さん——郡は拳銃ピストルを持っていますから。」

少し離れて半円を廻わして、遊山がえりの——自動車より前に駆集むれつた群が、間近くも寄らないのは、銅像に攀よじた魔の振袖のはじめから、何となきこの拳銃の影であった。

集つえる衆の肩背すきの透すきに、霊地の口に、自動車が見えて、巨像の腹の鳴るがごとく、時々、ぐわツぐわツと自己の存在と生活を叫んでいる。

この時しも、軽装した助手は、人の輪の前をぐるりぐるりと柄杓を上下に振って廻った。

「拳銃ピストルを……拳銃を……」

他かれを打てか、自らを殺せか——呼吸いきの下で、幽かすかに震えた、女は、まだ全く死んではないのである。

「危い、お父さん。——早く警察へ。」

「何をし得るものだ。——いや、時にいずれも、立合わるる、いずれも。」

運八翁は、ずかずかと横歩よこある行きに輪の真中へ立って、

「俺と伴の、この製作の名誉を嫉ねたんで。」

「そうですそうです。」

運五郎氏も、並んで、細い杖ステッキを高らかに振った。

「大銅像の目を傷けたんだね、両眼を——潰すと斉しく靈像の目が活きて光って開いた、虫の投落されたのをよく視て下さい。」

「柴山運八。」

「運五郎、苦心の製作に対して。」

と云った。

「あはッ、はッ、はッ、はッ、はッ。」

と笑ったものがある。この時、銅像が赤面した。一朵の珊瑚島のごとく水平線上に浮いた夕日の雲が反射したのである。肩まで霧に包まれたその足と、台座の間に、ちよぼりと半面を蟋蟀のごとく覗かせて見ていた、埃だらけの黒服の親仁が、ひよいと出た、妙な処に。——もつとも、この山のかかる時には、砲台形に並んだ丘の上をはじめ、少し脊の高い松のどの樹にも、天狗が居て、翼を合せ鼻を並べて見物する。親仁は、てくてくと歩み寄ると、閣翁父子の背後へ、就中、翁の尻へ、いきなり服の尻をおツつけるがごとくにして、背合せに立った。すなわち銅像に対したのである。

一人やなんぞ、気にもしないので、父子は澄まして、衆の我に対する表敬の動揺を待つて、傲然としていた。

黒服の親仁は、すつぽりと中山高を脱ぐ。兀頭で、太い頸に横皺がある。尻で、閻翁を突くがごとくにして、銅像に一拝すると、

「えへん。」

と咳き、がっしりした、脊低の反身で、仰いで、指を輪にして目に当てたと見えたのは、柄つきの片目金、拡大鏡を当がったのである。

「は、は、は、違う、違う、まるで違う。この大入道の団栗目は、はじめ死んでおったそれが鑿で活きたのじゃ。すなわち潰されたために、開いたのじゃ。」

「何。」

「あ、先生。」

と、運五郎氏がギクンと首を折った。

「柴山君、しばらくじゃ。」

「お父さん、お父さん、榎原——俊明先生です。」

東京——(壺)——芸学校の教授にして、(弐)——術院の委員、審査員、として、玄げ

武青竜んぶせいりゆうはいざ知らず、斯界しかいの虎！ はたその老齡の故に、白虎びやっこと称とえらるる偉匠ゐじやうである。

惟おもうべし近常夫婦の塚に、手向けたる一捻いちねんの白饅頭はくまんとの活いけるがごとかりしを。しかのみならず、梅鉢草の印たがねの鑿たがねを拾ひろつて、一条の奇蹟きせきを鶏とりに授けたのを。

「ええ、ええ、大先生、俵たわらがかねて……」

儀礼に、こだわりの過ぎるほど訓練のある、特に官職に対して謙屈な土地柄だから、閣翁あおむは、衆に仰向けに反らしたちようど同じ角度に、その頤あごを臍へそに埋めて、手を垂れた。

「——間違うても構たがわんです。あんた方の銅像どうざうに対する、俊明しゆんめいの鑑査かんさはじゃね。」

古帽子で、ボンと膝頭かたを敲たたいて、

「今の一言の通りです。」

父子おやこは、太息おげを通とおわせて、目を見合まつた。

「せち辛い世の中です、鑑査の報酬を要求します。はっはっはっ。その料金としてじゃね、怪我人を病院へ馳はしらす、自動車を使用しますぞ。——用意！……自動車屋。」

柄杓へしやくとともに、助手を投出ひうちすと齊ひとしく、俊明先生の兀頭はげあたまは皿はらのまわるがごとく向むかわつて、漂泊さすらいの男女の上に押被おつかぶさつた。

「別嬪^{べっぴん}。」

「あれ、天……狗……さん。」

「しかり、天狗が承合^{うけあ}うた、きつと治るぞ。」

道中^{どうちゆうじわ}皷^{どうちゆうじわ}の手巾^{ハンケチ}で、二人の頭も顔も涙も一所くたに拭^ふいてやりつつ、

「する事は乱暴じやが、ああ、優しいな。」

と、ほろりとして言った。

昭和三（一九二八）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、以下の箇所を除いて、大振りにつくっています。

「三ヶの庄を」

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ピストルの使い方

——（前題——楊弓）

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 泉鏡花

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>